

吹鹿庵主人新著

マホメツトの戦争主義

東京 春山房

96-271

目

緒

緒言

一、本編は主にコラン Kolan に由り  
てマホメットの片影を捉へむこと  
を希企したり

本編の目的は消々たる現代の平凡  
主義を聲鐘せむ爲に在り。左れば編  
中の大部分は、其折伏主義を鼓吹す  
るに費したり。



大なるかな天神、大なるかな天神、

予は天神の外、神なきを信ず、

予はマホメットは天神の預言者也と信ず、

嗟呼大なるかな天神、

天神の外に神なし、

祈りは眠に優る、祈りは眠に優る。(ピルラ)

### マホメットを草し終るの日

天使ガブリエルが所謂剣に依て教を廣めよとの訓戒は古に於て實在なりしが如く、今も尙世界の人心の根底に響けるものは是れ在らずや。

實在界に在て平和なる語は、必竟弱者が有する唯一の對強的武器なるに過ぎず、強きものは決して平和を口にせず、彼は恒に大なる威力と大なる権力と大なる信力とを保持して、凡ての上に活歩せり。彼が爲に、弱者の肉は割かれ、弱者の衣は奪はれ、弱者のパンは掠められざる可からず。是れ古に於て眞理なりしと、共に今も尙眞理也。

如何なる平和主義者に在ても、全然トルの神の勢力を否認するとは希企し能はざる所なる可し。パステイユの古城舊壁より一閃し來たる佛蘭西革命の歴史の裏面には、世界の一大平和主義者を以て自負せる

クリスチヤンの新舊兩思潮の大折伏を意味するを、何人たりとも拒む能はざるに非らずや。如何なる美言美語を以て、戦争を否認するとも、平和は斷して、實在界に於て何の勢力をも有せざる也。威權は、凡俗を壓し、氣魄は、地平線上に嚴として耀けり。古往今來、毫も異なる莫し。平和を云ふを止めよ、汝は弱者なれば也。是れ吾人が恒に繰返して、已まざるの信條也。

一朝風雲搖き、電雷轟くるとき、世界の平和が何の爲す所なうして、畏縮するを思へば、トールの神の其古へを支配せしが如く、今尙現代を支配するを、何人も遺却する能はざる可し。極東の惡土に、日蓮が戦争主義を鼓吹するの餘儀なかりしもの、洵に己むを得ざりき也。吾人は此點に於て、亞刺比亞の大精華たるマホメットの折伏主義に、多大の代價を拂はずむば非らざる也。

風無く、雲なく、一輪の月の女神、奮き歴史の千歳の松に懸りて、徐ろに清光を送るとき、美は即ち美也。然かも、怒濤狂浪の奔滔すること、三萬里岸爲めに碎けむとするの活ける壯圖に比して、孰れぞや、平和主義と折伏主義の、美の由て岐るゝ吾人の趣味の差異點は實に此くの如き也。吾人は、故にクロムウユルを愛す、ナポレオンを愛す、ルイテルを愛す、トールを愛す、サロペントを愛す、日蓮を愛す、マホメットを愛す、而して親鸞を好まず、クリストを好まず、家康を好まず、ペースの神を好まず、更に亦た女性を好まず、男性を愛す、文明を好まず、野蠻を愛す。勝てば即ち勝ち、負れば即ち負け、トールは則ち此くの如くなるに非らずや、戦争は則ち此くの如くなるに非らずや。嗟吁折伏主義、何ぞ夫れ雄大なるや、何ぞ夫れ男性的なりや。

吾人情々、方今の小説界を監視す、吾人は女性的文學の餘りに多きに過

ぐるに堪うる能はざる也。片々たる一二小説、素より以て意とするに足らずと云へども、之が現代青年の思想を潤色する唯一の魔力なりと云ふに到ては、心あるものは何人も寒心せず、非らざる可し。彼等紅顔の少年、相會すれば、即ち文學を説き、女性を説き、戀を説く、彼等の生命は、戀、女性、文學、此三者以外に毫も離脱する莫し。抑も彼等は、戀と女性と文學の外に、男子生存の眞意義、是れ莫しとや、誤了なさむすら、果敢なきは、現今紅顔の徒の運命也。

青年の思潮、滔々として此くの如し、之を以て、一代に意氣なく、元氣なく、威權なく、唯だ夫れ翠帳紅圍の平和を需めて已まず、嗟呼、是れ世の男性的生命を如何せむとするや。

吾人が現代に於て、恐れて怖るゝ所のものは、實に一代の戦争心の缺乏せるに在り、徒らに易に就て、難を避く、進歩那邊にか之を需めむ、勝利那

邊にか之を需めむ、抑も亦、人生の飛躍那邊にか之を需めむ、や、平和の社

會は、將に濁らむとするの社會也、墮落せむとするの社會也、徒に秩序を

云ふ、水の沈滞して先づ腐蝕する如からずむは幸而已、翻て視よ、戦争の

社會は、將に長夜の眠より覺めむとするの社會也、沈滞より進歩の境に

入るの社會也、舊より新、弱より強、易より難に入るの社會也、元氣乃ち生

し、威信乃ち生し、壓力乃ち生し、而して強者乃ち勝つ、光明と進歩と移推

と、是れ即ち、戦争の賜ならざる莫からむや。

吾人は、此見解を持して、以て現代の國民を警鐘し、現代の青年を覺醒し、

現代の文壇を戒飭せむことを期す、曩に一小論文「英雄僧日蓮」を上梓

し、今またマホメットの寶典コーランを基として、此にアラブソールの

大折伏主義を發露するもの、此希望に出でしに外ならず。

明治三十六年卯三月九日

マホメットの戦争主義を草し終るの日

東臺谷中の庵に於て

池元 叻 鹿 庵

マホメットの草を終るの日

# マホメットの戦争主義

## 目次

一、セムズエム泉の噴響	一
二、時代反抗の熱狂兒	八
三、偶像非認の聲	二二
四、マホメットの戦争主義及び戦争主義と天神(上)	四五
五、マホメットの戦争主義及び戦争主義と天神(下)	六六
六、マホメットの天神觀	八七
七、マホメットの女性觀	一〇九
八、マホメットの地獄極樂觀	一二九
九、マホメットの教訓	一四五

十、マホメットの零生涯……………一八七

十一、マホメットと其奇蹟……………二二五

十二、マホメットを憶ふ……………二三四

目

次了

# マホメットの戦争主義

呦鹿庵主人著

## 第一編 ゼムズエム泉の噴響

マホメットの戦争主義

漠々たる地平線上の大砂漠、今や漸やく盡きむとする所に、神來の奇香を送るパーム樹あり。一度亞刺比亞を旅行せし人は、何人も、此パーム樹の下に甚だ粗末なる堂宇の二個の黒き靈石を守りて、涼しく清く建てるを冷視し過ぐる能はざる可し。是れ世界に有名なる『メッカ』の『カアバ』堂也。カアバ堂の畔に一個の清泉の、今尙太古の儘なる響をなして滾々と噴出しつゝあるを視む、泉は宛がら神智靈覺の人の世を露す

可く湧出するものに似たり、『セムズエム』泉の名は如何に亞刺比亞  
 砂漠途上の旅客に對して新しき生命を授けつゝ、非らずや。吾人は此等  
 の名詞に接する毎に、吾人未だ曾て高尚なる感興を催はさずむば非ら  
 ざる也。堆雲堆土、殆むど人目を眩惑せずむば歌まざる低の大砂漠上、露  
 を帯びたる緑のバーム樹と、其處に草樹を萌ます可く湧出せるセムズ  
 エムの清泉と、舊き堂宇と、黒き二個の靈石と、新鮮なる太陽と、是れ既に  
 旅途にあるの人をして、矚目せしむるに足る能き配合に非ずや。是れ既  
 に大畫伯の靈筆に成れる活ける油繪に非らずや。爾り吾人は既に此か  
 るコントラストの上に、妙からざる趣味を有すると共に、更に進むで、當  
 時に於ける亞刺比亞種族が崇拜の斷片として、此カアバ堂に觸接し、  
 若くば世界をして親しく太古を回顧せしむる畏敬す可き私語の一と  
 して、此セムズエムの神泉に、落むに於て、殆ど天啓的高潮なる感興

に撃れざる能はず。此感想を持して、靜かにメツカの夜を直遙せむ。歟炎  
 熱消え去て、大空清澄、椰子の葉蔭に、星斗燦爛として、涼味を降し、萬物皆  
 な露に霑ひて、舊きセムズエムの神泉、獨り汝の心胸を占領して、響ける  
 を覺えなむ。嗟呼、そが響音の一部には、天使ガブリエルが聲と共に、マホ  
 メットが戦の聲も混ぢれるに非らずや。  
 吾人は今、アラビヤ思想の反抗兒たるマホメットを議せむとするに當  
 り、先づ筆を此カアバ堂より起すの甚だ趣味深きを思ふ。カアバ堂はマ  
 ホメットが母國たる亞刺比亞の最も舊き歴史の標章にして、亞刺比亞  
 思想の變遷は悉く無形の文字を以て堂中深く鏤刻され居れば也。太古  
 のアラビヤ種族が爲に、カアバ堂は實に崇拜の中心點なりき。同種族の  
 信念を以てすれば、トルの鐵槌も、惡魔の斧も、天神の仁惠も、此カアバ  
 堂中のものに非らざるは、莫く、宇宙一切の勢力大能及び天地の呼吸亦



此カアバ堂中に祭祀せる二個の靈石が心意如何に依て爲さるゝ作用に非らざるは莫し。而して此太古の思想はゼムズム泉の滾々として盡くる所なきが如く、紀元後五世紀に於て殆ど其極に達し、茲に偶像崇拜の大妄信を惹起するに到れり。此一代の悪思潮、惡傾向に反抗して起ちしものは、是れマホメット也。マホメットが前後二十三年間、劍を手にしながら叫べる『イスラム』也。カアバ堂とマホメット、眞に絶大の因縁ありと謂ふ可し。吾人がゼムズム泉の噴響を聞て、一種無限大の感興に撃たるゝもの故なしとせむや。疑ふものは是れを亞刺比亞大砂漠途上の旅客に敲け、彼等にして一度バアム樹の畔に舊き歴史を回顧するものは何人も、神智靈覺の湧出するが如きゼムズム泉の噴響に混ぢりてマホメットの喚叫の今も尙大空に對て響けるを聴取せざること莫かる可し。

『我は抑も何ものぞや人の宇宙と呼ぶところ。我の常に住む所の此玄妙の物は何者ぞや。生とは何ぞ、死とは何ぞ、嗟吁我れ何ものを信ず可きか。我れ何を爲し何を思ふ可きか。』

ヘネラの山、シナイの嶺、默として聳ゆるメツカのバアム樹の下、カアバ堂の畔、マホメットが最初の叫びはゼムズム泉の音と共に大空に響けるに非らずや。吾人はマホメットを憶ふごとに、恒に此ゼムズム泉の噴響に耳を籍さいる能はず。

尙吾人は今マホメットを議せむとする序を以て、巻頭に一言す可きもの有り。そは此等の偉人若くば預言者を傳せむとするに於て最も緊急なる可き『回顧の情』に就て也。吾人にして回顧の情の切なるもの莫からむ歟。吾人は所謂歴史美なるものを到底認識する能はざる也。從て總ての歴史が有する貴重なる教訓も、趣味深き記録も、遂に秘密の默契中よ

り他の秘密の黙契中に葬られ終る可し斯くの如くむば歴史遂に何爲  
 るものぞ左れば回顧の情は恰かも日光の秘密の寶庫を照らすが如か  
 る可き歟新しき太陽の舊き國土に耀くとき其塵に太古の山河は吾人  
 に活ける物語りを續く是れ即ち回情の情の賜也此くの如くにして而  
 して始めて歴史美は吾人の前に彩色を施され死せる記録は活きて吾  
 人の前に提供せらる偉人の傳記も英雄の史傳も吾人が有する回顧の  
 情の高潮に激せざる限り決して多大の趣味を帶ぶるものに非らずマ  
 ホメットに對しても亦爾り太古の面影を遣せる斷片のカアバ堂の畔  
 沈思默考靜かに過去を緬想するの情に耽けるとき吾人始めて活ける  
 古人に接するを得可し故に吾人は世のマホメットに對するものゝ切  
 に『回顧の情』深きものあらむを希ふて歇まず偉人に敬意を拂ふ是  
 れ吾人の義務なれば也

嗟吁、ゼムズム泉の噴水は今も尙太古のごとくに滾々として神智靈  
 覺の源泉たりアラビヤ思想の反抗兒たるマホメットが戰の聲は舊き  
 カアバ堂畔より大空に對て矢の如く響けるに非らずや皇帝親しく大  
 道を授けて吾を限り無く辱かしめ吾を死蔭と闇夜より救へり!!マ  
 ホメットが片言これ到底塵介の聲に非らず神智靈覺の神泉や彼を偉  
 大ならしめたる。

### 第二編 時代反抗の熱狂兒

吾人は豫言者としてのマホメットよりも寧ろ唯だ單に一代反抗兒としてのマホメット即ち時代を批評するの戰爭兒としてのマホメットを視むとに多大の趣味と感興とを有せり。クリストや親鸞の傳道を以て平和の福音と云ひ得可くむば、ルイテル、クロムウエル、日蓮若くばマホメットが如きは、當に戰爭の福音を示したるものなりと云ふを得可からむ。故に吾人はマホメットが持する戰爭主義に就て茲に多くを語らざる可からず、而して是を語るには宜しく先づ彼が戰爭の唯一標的を示し置くの要あり云ふ迄も、彼が極力其折伏主義を傾射して、歇まざりし目標は、當時亞刺比亞一代の人心を腐蝕せしめし偶像崇拜の妄信を啓くにありたり。マホメットは此偶像崇拜の妄信を打破せむ爲め

には殆むど有ゆる熱誠と痛罵とを母國人に放ち、而して遂には劍に血塗るの大悲劇を演ずるを恨まざりき。彼れ偶像崇拜の妄信徒を冷罵して曰く、

「偶像崇拜は素徒戯に過ぎず。汝が拜禮する此木像これに點するに油を以てし、之に塗るに蜜蠟を以てせよ。然らば群蠅忽ち來て之に粘着せずや。余は汝に告ぐ、是れ即ち木片也。神靈に非らず。活智に非らず。此無情なる木片豈に何をか爲さむ。汝等亦何をか彼に得む。」

片言隻語尙且つ妄信者流を打撃し盡すの概ありと謂ふ可し。マホメットは此妄信を打破し、而して母國亞刺比亞の種族を悉く、アダム、ノア、アブラハム、モーカ、基督の標章し傳道し布教せる天神の宗教に歸すを以て自己本來の大目的と信じ、且つ天授の使命なりと確信して疑はざりし也。其偶像崇拜を冷罵して「是れ必竟木片のみ」と一喝し去りし威

力に到ては例へば日蓮が念佛宗を目して『紫衣を着せる悪魔の子也』と叱阿し若くばルーテが羅馬法皇の根本勢力を否定して『彼の片足は地獄の上に在り』と熱罵せしに似たらずや。マホメットの面目と其主張とは眞に此片言隻語の上に發露し活躍せりと謂ふ可し。

太古の亞刺比亞種族間に二個の殞石たる彼『カアベ』堂が如何ばかり重視せられ而して如何ばかり亞刺比亞人の思想に感化を與えしかは吾人今改めて記さずとも世の夙に認容する所ならむ其純粹にして高潔なる太古の信念は紀元五世紀より六世紀に到り遂に亞刺比亞種族を誘惑して偶像崇拜の大妄想大迷信の極に引致したるを恨まざる可からず眞の信仰と迷信とは互に相類似たるが如しと云へども壁一重にて恐らく千萬億里の隔てあるもの也偶像崇拜に到ては遂に人類の信仰心を賊するもの砂漠の子たるマホメットが其素養なく學識な

Hero All mighty

き末製品の粗貌を以てして一代の悪思潮に大反抗を勉めしもの洵に己むを得ざりしもの無くむば非らず。

然れども之を以て直に太古に於けるアラビヤ思想即ちカアベ堂中の靈石を宇宙唯一の大能とせし太古亞刺比亞種族の宗教心を迄訝しむは聊か酷に過ぐるものあり獨り亞刺比亞に於て然るのみならず總ての部落の人種に徴し視るも混沌時代に於ける人類の宗教心は凡て此くの如き茫漠たるものなるに過ぎず或は月星を目して宇宙のオートルマイトイと爲し之を仰いて天神の實姿なりと信せし人類もあり或は太陽を拜して天地の大王なりと信し日蝕に接しては天神人の世を恨み其神姿を隠すもの也と確信せし人類もあり古代スカンデナビヤ人種の爲めには氷塊は實に大魔王に非らずや『ハイミル魔眼を開きて一度睨めば巨巖忽ち碎く』とはスカンデナビヤ古代人の確信なり甚

だ○し○き○は○雲○神○を○信○じ○風○神○を○信○し○地○神○を○信○し○海○神○を○信○し○山○神○を○信○じ○草○木○を○も○信○せ○し○人○類○あ○り○完○備○せ○る○宗○教○無○き○太○古○に○在○て○人○類○は○遂○に○此○等○の○或○る○も○の○を○信○仰○す○る○の○已○む○を○得○ざ○る○に○非○ら○ず○や○現○に○新○文○明○を○以○て○誇○る○今○代○に○於○て○尙○ほ○種○々○な○る○物○躰○を○崇○拜○す○る○の○遺○風○愚○習○を○全○然○斥○く○る○能○は○さ○る○も○の○あ○り○吾○人○は○太○古○の○ア○ラ○ビヤ○種○族○が○カ○ア○バ○堂○を○其○崇○拜○の○中○心○點○に○擬○せ○し○こ○と○を○毫○も○人○類○の○耻○辱○と○せ○さ○る○也○ト○ール○の○槌○も○サ○ー○ペ○ント○の○斧○も○宇○宙○一○切○の○呼○吸○が○カ○ア○バ○堂○中○よ○り○發○露○す○と○爲○せ○し○確○信○を○毫○末○も○後○世○の○不○名○譽○と○爲○さ○し○る○也○單○調○な○る○太○古○に○於○て○純○潔○に○し○て○何○等○の○惡○潮○に○も○感○染○せ○さ○る○混○沌○の○人○類○が○日○月○星○辰○を○崇○拜○す○る○こ○と○寧○ろ○當○然○の○次○第○な○れ○ば○也○否○な○吾○人○は○之○に○依○て○却○て○人○類○の○宗○教○心○が○殆○む○ど○天○與○的○な○る○を○益○々○確○證○せ○む○と○す○即○ち○人○類○が○有○す○る○向○上○的○精○神○は○産○れ○な○が○ら○に○し○て○天○與○的○の○も○の○な○る○を○立○證○せ○む○と○す○唯○だ○夫○れ○此○等○高

深にして天與的の宗教心が時代の變遷の如何に觸れて迷信の域に陥り遂には偶像崇拜の極愚に感染するに到ては世人の能く堪え能ふ所に非らざる可し故にマホメットは此大妄信を其母國人の胸底より撤去し母國人の總てをアダム、ノア、アブラハム、モーガ、基督等の眞宗教の根本教義に歸へす可く奮闘せざるを得ざりし也。クロムウェルが七度神に祈禱して始めて戟を握りしが如き、日蓮が極東の神帝國を惡國惡王惡臣惡民のみと熱罵せしが如き、將た亦サキニ一の「寒僧ル、テ」ルが教界の大勢力たる羅馬法皇に向て「眇たる粗服の一塊肉、我れ此に立て汝等の總てより強し」と絶叫せしが如き、惟ふに孰れか亦邪教打破妄信拒絕の信條より迸出し來つたる時代要求の叫聲に非らざる可きや。マホメットが前後二十三年間の歴史を血に塗りて而かも毫も恨まざりしもの此確信と其主張在て然りしを信ず。

マホメットは西曆五百七十年に於てメツカに産れたり、歳甫めて六才既に慈母敬父を失ひて荒野の孤兒となれり、然れども幸にして同一血統たる國中の名流『コレイシユ』家の在るあり、荒野の孤兒は『コレイシユ』家の温き家庭に成人するを得たりき、當時亞刺比亞國は偶像崇拜教の犯すところと爲りて、其弊殆むど極に達せり、而して國中の名流たる『コレイシユ』家の如きは實に偶像崇拜教の上にて於ても亦其名流たるに恥ぢず、マホメット此家庭に人と成り親しく偶像崇拜の妄信に接す、彼や其徒戯に類するに先づ倦まざる能はず、而して其弊の亡國を告ぐるものあるを視るに及びでは誰かまた偶像崇拜教の跋扈に憤激せざらむ、ルイテルがウオルムスの議會に落み二時間餘の長きに亘りて羅馬法皇彈劾の演説を爲さる可からざるの日を持ちしは彼が二十七歳の時サキソニーの一寒村を出て、始めて羅馬の腐

敗を視みしの日にて發萌したりき也、日蓮が權門權教の輩を罵りて『念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊』の四格言を放たざる可からざるに到りしも、亦其殆めて清澄寺の山門を出て、鎌倉に無識無學の僧の紫衣を縋ふて徠往せるを實見せしの日にて萌まれたりきに非らずや、更に釋迦を見よ、彼が金殿玉樓の迦比羅城を棄遺して伽闍尸梨沙山の苦行林に入るに到りしは、是れ何が故ぞ、彼釋迦は實に浮世の徒らに肉慾的なるに倦みたるに非らずや、身は是れ迦比羅城中の皇太子也、位、人の世に絶し朝歌夜絃の榮華希ふて得られざるは莫し、然かも釋迦に在て是れ何の榮華ぞ、何の名譽ぞ、釋迦は却て此日に於て五慾の何等の詮なきを感ずるの餘儀なかりしに非らずや、國の一半を割て與へらるゝと其全圓を與へらるゝと他國を統治すると、釋迦を以て視は到底徒戲のみ、釋迦は是等の徒戯に憤激して五慾に煩悶せる一代の人心に洗禮を

與えざるを得ず、彼が迦比羅城を遺棄して迦闍尸梨沙山中のものたり  
 もの、其動機實に此點に發萌せりと謂ふ可し。今マホメット國中に於け  
 る偶像崇拜の中心點たるコレイシユ家に人と成り、日夕淺薄無味の  
 妄信に接す、荒野の子たる彼は始めて羅馬の腐敗を實檢せしル、  
 が如く、鎌倉佛教の腐敗に觸接せし日蓮が如く、將亦た五慾界の濁潮に  
 憤激せし釋迦が如く、茲にマホメットは此偶像崇拜の妄信を打破す可  
 く、呪咀を爲さざる能はず。  
 マホメットは山林中の沈思默坐に依て大なる宇宙の私語と高遠なる天  
 國の威權とを認めたり。マホメットに秩序ある教育なし、然れども千万卷  
 を讀破なしたる夫れよりも熱情あり至誠ある彼に取りては寧ろ純潔  
 なる自然の洗禮を受くることの遙かに偉大の教育たるを意味せずむ  
 ば非らず、彼れ不幸にして組織的の教育を受くる能はざりしと云へど

も彼は却て之が爲め屢々山林中の人となるを得て、山の聲、林の音に耽  
 けるの快樂を持したり、荒野の子たるマホメットは此くて淺薄なる皮相  
 の書中より妄信を捉へ來らず、高潔にして清淨なる大空よりして直に  
 天啓的の感興と信念とを得來つたる也。毎年一月間を山林中に隱遁す  
 るはアラビア國人の美なる風習の一なりき、マホメットが此風習に倣て  
 始めてメツカの近傍なるヘエラ山中の人となりしは、彼が九歳の時の  
 ことなりき。夫より彼は亞刺比亞國習を襲踏して毎年必らず九月を以  
 て自然の洗禮を受く可くヘエラ山中に靜坐を試みし也。砂漠の名花は  
 到底人爲的にして美しき姿を發するものに非らず、彼は飽迄も自然の  
 懐に眠り、自然の手に教育されざる可からず、マホメットが區々たる學  
 理の末に泥まらず直ちに自然に觸接し、直に天神と晤せむを勉めしもの  
 彼れに取て非常なる悟道の捷徑に非らずや、彼の有名なる『コトラン』

(Koran)は此山林静坐の産物なりき、イスラムの一切亦た委く是れ彼がヘエラ山中より養ひ來つたる默思の産物に非らざらむや。

此くの如く一言にして掩へはマホメットは亞刺比亞砂漠中の砂金と  
同じく何の琢磨も製造も施されざる粗雑の金塊に異ならず唯だ自然  
の兩風に養はれて微かに光を放ちしと云へども到底未製造の三字の  
冠詞は彼の頭上を拂ふこと能はざる可し其言語の粗未なる其風彩の  
天真流露なる鶯色にして稍や澹紅を帯べる顔色美なる眉目の間に備  
はる威權此等は一も琢磨を加へられしものに非らずして自然の發露  
に過ぎざりきマホメットは飽迄も自然の子也荒野の子也砂漠の子也  
其風姿は茫漠にして荒敗せる亞刺比亞砂漠の感染に育し其思想はゼ  
ムズム泉の噴響とヘエラ山中の神秘より養はれ來る自然の産物と  
は夫れマホメットを謂ふ歟。

inspired

蓋し身を山林静寂の地に隱遁して自然の教訓を受け自然の洗禮を受  
け而して自然の私語に撃れてインスパイアトせむとするの美なる  
風習は獨り亞刺比亞國人の專有物に非ず舊き時代に於て孰れの部落  
人も亦た此思想を有したりしが如し婆羅門教に就て視るも爾り婆羅  
門の僧侶は悉く山林深く苦行して或は斷食し或は不眠し而して静か  
に心意を練りしもの也釋迦が伽闍尸梨沙の山中に遁れ静坐默思大な  
る思想に耽けりしが如き亦是れに外ならず吾人たりども亦濁世の濁  
潮に堪え得ざるのときは屢々山林静淨の地を懐ふて歇まず其處には  
清き空氣あり新しき太陽あり林の私語は神の子の戯るゝが如く溪川  
の響は天女の直に吾人に語るにも似たり凡ての思想は此かる自然の  
洗禮を受けて始めて高潔を致し偉大を致すものなる可し。

偶像崇拜の愚なる風習に倦み疲れしマホメットはヘエラ山中の静思



に依て何ものを捉捕し來りしや、彼は先づ一代の惡時潮の漲奔せる愚  
 教の中心點なるコレイシユ家を出で、ヘエラ山中の深林に來ると共  
 に、彼は自然の偉大に驚愕せざる能はざりき、『天外高く雄飛して無限  
 の蒼窮を掠める大雲は是れ何處より來り何處にか去る』とは、マホメ  
 ットが彼蒼を仰いて驚嘆せし語ならずや。  
 宇宙は無窮也、大空限り莫し、此間に雨何處より來て何處にか消え、風  
 何處よりか起て何處にか去り、燦爛たる星斗出て、又没す、其大能力、其  
 大勢力、決して一木片一偶像の能ふ力に非らず。嗟呼、人の仰いて宇宙と  
 呼ぶところ、我の常に住むところの此玄妙のものは何者ものぞや、生と  
 は何ぞや、死とは何ぞや、我何を信す可きか、我何を爲す可きか、マホメ  
 ットは自然の偉大に擊れて先づ此大疑問に逢着するの己むを得ざり  
 き。

ヘエラの山林に在て、マホメットが幼なき胸に高き波を起せしは、實に  
 此疑問なりき。出で、ゼムズエム泉の畔を逍遙すれば、汚れ無き噴水は、  
 滾々として太古を語る、マホメットは遂に現代の愚教の煩累を脱却し  
 て直に神の教の本體に歸らざる可からず、而して彼が偶像非認の戰宣  
 を發せしは、年四十歳の後にあり、一代の惡時潮は滔々として母國を亂  
 せり、マホメットは自然の教訓を齊して母國人の蒙を啓かざる可から  
 ず。蓋し是れ神の命ずる所也。

第三編 偶像非認の聲

イ、ス、ラ、ム、教の寶典『コーラン』を繙きしものは、何人も偶像非認の文字の多さに驚かむ例へば、日蓮の遺文録を繙くもの、國を罵り王を罵り權門權教を罵る文字の多きに驚くが如し。權門權教を奉持するの國土には、魔來り鬼來り、天は瞑りて眼を閉ぢ、地は怒りて五穀稔らず、三災七難旺に並び起て人心安ずる所莫し、是れ當時の日本國に非らずや。日蓮が怒濤的の熱誠と日蓮が巨巖的の威權とは、先づ何物を措いても權教打破に傾射されざるを得ず、偶像崇拜の其極に達せし亞刺比亞の當代は、權教の一代に跋扈せりき、日本國の當代よりも更に病弊の甚だしきもの存したりき。コレ、レイ、シ、ユ、家のごときは、云ふを俟たず、亞刺比亞國民の悉くは、偶像崇拜の妄信に陥り、其遺習長く、人心を犯賊して、今

や、其極度に到達し、國は爲に衰頹し、人の子は爲めに亡びなんとせり。マホメットは先づ民族の迷夢を覺醒して、此惡思潮を廓清す可く、一代の病根たる偶像崇拜教に向て大鐵槌を降下せざる可からざる也。マホメットは前後二十三年間諸民族の誹謗を蒙つて、而して戰ひたり。其確信の堅にして、犯す可からざる、其威權の猛にして、仰ぎ見る可からざる、此一事を以ても立證する可き也。

砂漠の子、荒野の子、自然の子たる、彼れマホメットは、ヘネラ山中の靜坐よりして、實に此確信を得來つたり、恰かも迦比羅城の玉樓を遺棄したる釋迦牟尼佛が伽闍尸梨沙山の苦行林に於ける修食の産物として、一種高潮の感興に擊れて、而して最大の思想を齎らし、天啓の鍵を持し來りしにも比す可き歟。マホメットが言語は粗朴也、左れど彼の辯舌はアラビヤ民族たるに恥ぢずして、爽快也、雄絶也、マホメットが風姿態度は

未製品也然れども彼の一舉手一投足には威權あり犯す可からず荒野の子たるマホメットは自然の素養を經るに従てアラブ人の本性を發露し來り其確信は殆むど最熱潮の語氣を帯びて亞刺比亞民族の頭上を見舞はずむば歇まざらむとせり蓋し是れヘラ山林の賜なりとせざる可からず。

『彼の言語は半ば戰闘的の概あり其蓄薇のごとき唇端を破つて迸出する言語の大半は赤血色を帯びたり。』

こはリヒテルが羅馬法皇の根本教義を否定して起ちたるルーテルのウオルムス議會に於ける偽效彈劾の演説を批評せるの言也。

今若しイスラム教の一大寶典たるコーラン (Koran) を一瞥せむ歟人は先づマホメットの言語の悉くが赤色の熱血を帯びて紙上に活躍せるに戰慄せざる能はざる可しルーテルの言語の半を目して戰闘的の

弊ありと爲す可からむにはマホメットの言語は其總てを擧げて魔王主義のものなりとせざる可からざる也。

マホメットがコーランに於て發せる戰闘的の文字の容量は日蓮が遺文録に於て露せる夫に一步を進めたるの趣あり而して日蓮をして惡時代反抗の熱狂見たらしめサタン主義の權化たらしめしものは實に其惡遺傳の血液なりき日蓮が生涯の活歴史は此惡遺傳の惡血液の爲めに各ペトシを通じて赤血色に塗抹されざるを得ざりき也怒濤沫立つ無限の洋上に追ひて魔王の旗色を狂風に翻へしながら大咆哮を逞うするサタン主義の裏面には漁夫の兒穢多の兒と云へる如き殘忍なる血液の日蓮が胸底に漲奔しつゝあるを何人も否む能はざるべし然れども均しく魔王主義の行者なりと云へどもマホメットに到ては大に歴史を異にせるもの有りマホメットの血統は決して日蓮が如くに酸

鼻なるものに非らず、穢多の兒若くは漁夫の兒と云ふが如き惡遺傳性に非らずして、兎にも角にも一代の名流たるコロトイシユ家の末葉に連なれり。素より釋迦が迦比羅城中の貴む可き血統を受けたりしものや親鸞が我國の畏敬す可き流に在りたりし夫れに比す可くも非らざれど、然れども素性の怪しきキリストや白蓮に對比せむには、彼の血液は尙遙かに清潔なりしもの莫くむば非らず。左れば彼れマホメットが抱持する魔王主義は抑も那邊より捉へ來りしものなる歟。是れ世人の動もすれば其發動點を疑ふ所なる可し。吾人を以て視るにマホメットの魔王主義は全然ヘエラ山中の靜思より授けられたるものなるが如し。即ち炎熱焦土の荒暴にして茫漠たる大砂漠は彼を育成して戦争主義のインカーチーションたらしめしものならむを信ぜざる能はず。例へば惡遺傳の日蓮にして始めて其歴史の凡てを赤血色に塗抹するを

得しが如く、荒野の感化を受けし彼マホメットにして、茲に砂漠的争闘主義の偉人たるを得しものなるを信ぜずむば非らず。惟ふに自然の力量強大に、人心に感化を與ふるものは莫かる可し。僅かに我國の小歴史を緝くも富士山の森嚴にして高莊なる氣魄の进出せる所には、三河武士てふ一種偉大の民族を現はし、而して其三河武士の型典としては、今川義元のごとき、徳川家康の如き、一代の英雄を産めり。飛彈美濃の深溪は明智光秀を産み、木曾義仲を産み、巴御前を産み、黒田如水を産める。更らに曠茫たる武藏野の原野は太田道灌を産み、北條早雲を産み、勝海舟を産めるに非らずや。自然が人心に波及する感化力は絶大なりと謂はざる可からず。到底千萬卷の書冊の教え得る所に非らざる也。

アラビヤを見よ。其荒暴慘憺にして而して茫漠なるものは、是れ既に未製品の偉人の出現するに最も適せるものに非らずや。古より亞刺比亞魂

なる一語あり、其豪放にして、天真流露、燃ゆるが如き熱情と、春風の如き温情と、確乎抜く可からざる思想とを有せるを、証言するもの也。此等一切の特徴、眞に是れ亞刺比亞の荒暴なる自然が、此民族を育成し、感化せし賜に非らずや。極熱の光線を放つ太陽が、東より西に傾く迄の間は、漠々たる大砂漠、焦熱の地獄と化して、途上の旅人及びラクダをも渴死せしめずむは、歌まざるも一度太陽西の地平線下に落ちぬれば、涸れたる草は蘇り、土は露に霑ひ、大空清澄として、燦爛たる星斗、宇宙の大を示すものに似たり。荒暴の自然既に偉大也。アラブノールたるマホメットは、此くの如く偉大に而して、荒暴ならざる可からざる也。マホメットが戦争主義は、實に此自然の感化より得來つたるものなるを、何人も否定し得ざる可き歟。荒野の感化は、茲に亞刺比亞民族の精華たるマホメットの活歴史をして、怒濤沫立つ洋上に號令するサタンの如くに、赤血色中

のものたらしめずば、歌まざりしものたる可し。

此かる感化よりして、養ひ來つたる惡時代警鐘のマホメットが聲は、偶像崇拜熱の下に腐蝕し行きつゝある亞刺比亞民族の爲めに、殆むと惡魔の響の如くに痛罵せられて、一代の反撥を買はざらむとするも得ざりき。是れ素よりマホメットに於て、驚く可きの事態に非らず。今や一代の亞刺比亞人心は、翕然として迷信渦中に夢酔しつゝあるの時に非らずや。彼等の状態は、恰かも惡酒に泥酔せる愚狂の人に似たり。若くはアヘンに眠れる亡國の民にも似たり。彼等の爲めに、其覺醒を呼ぶものあるも、彼等に取ては、是れ寧ろ心地よき醉夢を破らむとする破壊神の叫びに異ならず。マホメットならずとも、誰か醉人の反撥に逢遇せざる可き。預言者の一代に容れられざる、獨りマホメットに於てのみは、是れ非らざる也。一代に容れられざる尙ほ可也。彼は今や同一血統たるコレ

イシユ家より彈劾されざる可からざるの運命に到着したり。是れ恰かも我日蓮が其幼時の歴史を潤色せる千光山清澄寺の説教壇上に彈劾されたるに似たらずや。

日蓮が其數千萬卷の反古堆裡より發見せる念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の四大格言を、戰鬪歴史の第一ページに於て、先づ其因縁深き千光山清澄寺の説教壇上に試みしが如く、マホメットも其ヘニラ山中の靜坐默思に依て得來りし偶像排斥の大信念を、先づ最初にコレイシユ家に於て發言せざるを得ざりき。

彼が亞刺比亞種族の偶像崇拜心と戰ふ可く、コレイシユ家に於て發せる宣言の如何に赤血色を帯びたらずや。曰く、汝等の崇拜する偶像は一個の木片也。一個の木片に向て朝夕拜禮の儀を構ふるも何の得る所ぞ、必竟是れ愚蒙の人の徒爲に外ならず、汝等偶像崇拜教の人々よ、疑ふ

らくば、汝等が目して以て神體視せる其偶像に、點するに油を以てし塗するに蜜蠟を以てせよ。然らば蒼蠅は來て之に纏附す可き而已。嗟呼、是れ何の大能ぞ。何の神ぞ。我れ眞の神の爲めに、汝等に告ぐ。是れ神に非らず。黒き木片のみ。——と如何に其の聲の強猛なるよ。カアバ堂の擁護者として國中の名流として、メツカの一大勢力たるコレイシユ家に於て、其崇拜せる偶像を叱呵し彈劾して、是れ黒き木片のみと放言す。誰か其言の狂暴にして餘りに突飛なるに戰慄さむ。列み居るコレイシユ家の人々は、驚いてマホメットの顔を仰視せり。

マホメットは人々を睨睥して、更らに其語を續けり。曰く、神は一也。仁惠也。天地の創造者也。晝夜の界をたて、海に於ては帆走る船の爲には風を造り、地に於ては雨を降らして死せる土を霑し、果實を稔らす。カアバ堂に祀れる二個の靈石の如きは、決してオールマイテイに非らず。是れ皆

人の知る可き筈ながら、然かも神の外に我亞刺比亞國人は偶像を造り、一片の黒き木片を祀て神の如く崇拜せり、彼等は眞の神の爲めに罰を得ざる可からず、彼等は地獄に落ちて其身を火に焼かれざる可からず、メツカ人よ、殊にコレ、イシユ族よ、唯だ夫れ神を信ぜよ、我は決して眞の神の外木片を信ぜず、汝等よ、イスラムの外の宗教に據るものは神に悦ばれざる也、——と、爾り、黒き木片を信じて之を神也と爲し、天下の大能、宇宙一切の呼吸、皆な是れ偶像の心意の發露に外ならずとせる亞刺比亞族の如きは、抑も愚狂の極而已。コレ、イシユ家に對して、此一大痛棒を與へしマホメットの意氣に到ては、眞に猛烈にして、當る可からざるもの莫からずや。

コレ、イシユ家の人々は、殆むど冷笑を以てマホメットの宣言を迎えたり、現に同家の長老アブタレブの如きは、一日彼マホメットに告げて

曰く、吾子の言何ぞ、夫れ不遜の甚だしきメツカ人は恐らく、吾子の言に十歩の間だも耳を藉すこと勿かる可し、吾子如何ばかり熱誠を以て尊敬す可き偶像を嘲罵するも、吾子が之に依て得るものは諸人の激憤のみ、豈に亦何をか爲さむや、需めて他に恨みを買ふ如き、我の甚だ吾子が爲めに悦ばざる所也、吾子が信念の如何は我決して咎めざる可し、唯だ夫れ他に向て之を説くを欺めよ、——と、蓋しアブタレブはマホメットが爲めに實に叔父なりき、而して彼はマホメットを愛すること諸人に秀れたりき也、之を以て此言ある洵に至愛の極より湧出したるものなる可し、左れど自己が信念の爲めには有ゆるものを犠牲にす可く決意し、而して偶像崇拜の迷夢を啓醒せむ爲めには、其の後半生の歴史の總てのペトシに血を塗抹するも尙恨む所に非らずと確信せし荒野の子マホメットに取ては、此叔父の至愛より湧出せし忠言も、遂に何の要も爲

さとりき。雷に何の要も爲さとりしのみならず一代の反抗兒たるマホ  
 メットは、却て此言に激勵せられて、彼は凜然として絶叫を試みたり。曰  
 く、假令日輪我が右に現はれ、假令月輪我が左に現はれ、而して我に沈黙  
 を命するあるも、我は決して黙すること能はざる也。我は神の預言者也。  
 我が言はむとする所のものは神之を云はしむる所のもの也。如何に日  
 月之を禁し、如何に一切のコレイイシユ族之を禁し、如何に一切の民族  
 我に沈黙を促がすも、苟くもオールマイテイたる上帝にして之を我に  
 許さむ限りは、我は断して我が信念と主張とを世に公にせざる可から  
 ず。而して一切のコレイイシユ族及び一切のメツカ人及び一切のアラ  
 ビヤ人を亡國の濱より蘇がへらせざる可からず。是れ我の任務なるを  
 奈何すべし。吾目的は國人の迷信たる偶像教を變じて、アダムノアアア  
 ラハムモイガエス等の宗教に歸へらさむを期するもの也。汝等にして

偶○像○を○禮○拜○す○る○の○閑○あ○ら○ば○去○て○ヘエラ山○中○の○私○語○を○聴○け○ま○た○去○て○ア  
 フ○ラ○ハム○が○踏○み○し○石○を○見○よ。と其語氣雄大、其格調健豪、蒼色にして  
 濃紅色を帯べる彼の顔面には、燃ゆるが如き熱心あらはれ、至誠の泉は  
 兩眼を濡して、涙は頬を傳はれるに非らずや。

於戲然しながら、是れコレイイシユ族に取て何の福音ぞ、何の警鐘ぞ。荒  
 野の子たるマホメットが九歳より四十歳に到る迄、殆むと三十年間、毎  
 年のごとくに三十日をヘエラ山中の靜思に費消して、而して僅かに捉  
 へ得たる天來の一大思想、天啓の鍵は、雷にアラビヤ民族を頓悟せしむ  
 ること能はざるのみならず、メツカ人をして悔悟せしむるにも價ひせ  
 ず。遂にはコレイイシユ族の厭む所となつて、幾多の危難に迫はざる  
 能はず。退いて想ふに、我日蓮が千光山清澄寺に於ける最初の説教壇上  
 に、凡僧の彈劾する所となりしにも比す可き歟。日蓮は前後十三年苦行



研學の結果として、八萬四千の反古堆裡より發見し來つたる法華經の新眞理を示す可く、彼は何物よりも最初の説教壇を清澄寺内の法壇に選びたる也、是れ彼が日蓮と因縁深き清澄寺より其折伏を始めて而して清澄寺を以て一切法華經の大本山たらしめ、然る後、徐ろに天下に折伏を試むとする順序なりしならむ。之を以て日蓮は、其活生涯の總てを通じて活躍せる四大格言を、最も大膽に、最も露骨に、最も熱心に、清澄寺内の法壇に於て宣言發布せざるを得ざりき。そは尙マホメットが最初の説教をコレイシユ家に於てせしに對比す可し。清澄寺の法壇より日蓮が言は恰かも魔氣を帶べるが如くにして並み居る凡僧等を戰慄せしめぬ、曰く、念佛は無間也、禪宗は天魔也、眞言は亡國也、律宗は國賊也。——と、今や念佛は天地に充ち満ちて禪、眞言、律等の諸宗亦偉大の方人を有せり、此等の勢力に對して清澄寺の一若僧が熱罵はトールの鐵槌

よりも鋭く響けり、百十の凡僧等彼が聲に接して先戰慄せざるを得ず、彼を冷笑し、彼を嘲笑し、彼を狂人と呼ぶの聲は彼が起てる説教壇下より湧き來て彼は遂に七字の題目を掌にして小湊を追はれざるを得ざりき。是れマホメットがコレイシユ家を追はれたると孰れぞや、日蓮が『我は法華經の行者也』と叫びし時は、マホメットはメツカに於て『我は神の預言者也』と絶叫せし時に非らずや、其自信の堅固、其氣宇の健豪、直に以て人の世を威服せしめずんば己まざるの樂に到ては、威權自から犯す可からざるもの、在りと謂ふ可し。

マホメットがコレイシユ家に於ける最初の説教を、日蓮が清澄寺の法壇に於ける夫れに對比し、吾人甚だ趣味多きを覺ゆると共に、吾人は更に之をルイテ、ルガウオルムスの議會に於ける羅馬法皇、彈劾の演説に對比して一段の興を催はさずむば非らず。——我は是れ獨逸の一寒

僧也。眇たる獨逸の一寒僧。我れ此に立つて汝等の總てより強し。我は孤獨にして友無く。我が衣は垢つき。我が言は甚だ美ならずと云へども。而かも我は眞也。我は神の眞理の上に起てり。汝は汝の金冠を以て其三重の玉冕を以て其財貨と武庫とを以て靈俗三界に勢力を有すと云へども。起つ所は惡魔の僞にあり。豈に如何ぞ強大なるを得むや。又曰く。我文書一部分は我の言也。而かも他の一部分は神の言也。我言は内に人間の弱點を混じ不愼の憤怒狂狷の頑迷。夫れ或は此種のもの多からむ。之を全く棄つるを得ば是れ實に余の爲めに幸福也。然れども健全なる眞理及上帝の言に據て起つものは決して削り去る能はず。我何ぞ之を能くせむや。汝等若し我言を難じ毀らむと欲せば須らく聖經の論證に由り若くば正明の抗議に據りて我を辯難せよ。然らずむば余は斷じて之を削除する能はず。良心に背き神意に背きて僞事に與するは余の最

も忍び得ざる所。嗟呼。我れ此に立て汝等の總てより強し。其金冠と其三重の玉冕と其財貨と其武庫と僞善者に在て夫れ何爲するものぞ。と。羅馬當時の腐敗を憶ふものは何人たりとも。ルーテルが此言の今尙ほ旅客の耳に響くを否む能はざる可き歟。日蓮は清淨寺を追はれて鎌倉覇府に来るや紫衣の智識の列座せる中央政府の議席に於て當時日本宗教の腐敗を摘指し各宗僧侶の無學と妄信とを彈劾し更に日本國の濁流に感染せるを痛議し「我は是れ釋迦の行者也。今にして我言を把らずむば他國侵害自界反逆の二難來るべし」と云ひ「我を罵る國には魔來り鬼來り疫癘旺に流れて死人の屍山をなし野を埋む而のみならず諸有の井泉悉く枯涸し苗稼悉く皆な枯死し日月忿て光を放たず星を降し血を流す嗚呼これ濁世の我を罵るが故に非らずや邪法邪師の國土に充ちて我言を容れざるが爲にあらざるや紫の衣緋の飾彼等必

竟、一個の凡骨を美に装ふへるに外ならず、嗟、吁、各宗の僧侶よ、我は法華經の行者也、代を語れば則ち像の終り末の始め、地を尋ねれば唐の東羯の西人を原ぬれば則ち五濁之生鬪諍の時、釋迦の行者此に現はれむとは天臺大師の預言に非らずや、我は是れ釋迦牟尼佛の再現也、我を毀らむものは直に無間地獄に墮つ可し』と大喝し去りたり、今之をマホメットがコレイイシユ家に於てなしたる言に徴す、殆むど相均しきの威權と意氣と壓力の存するを認む。

マホメットは假令日輪我が右に現はれ月輪我が左に現はれて我に沈黙を命するも我は決して黙すること能はざる也、云へり、況むや凡俗たる一個のメツカ人の命令をや、更らに況むやコレイイシユ家の命令をや、彼豈に沈黙を守らむや、彼の言ふ所にして苟くも宇宙の大能たる上帝の許す限りは、そは眞理に非らずや、而してマホメットは神の行

Arab saul

者たる也、氣宇の雄大、凜然たる威權、ルイテル日蓮の高潮に達して、一個アラブツールは茲に神の行者たる可く高踏せるを視る。

マホメットは偶像崇拜を罵りて、之れ神に非らず、一個の黒き木片のみ、と冷笑せり、ルイテルが羅馬法皇を弾劾して、悪魔の上に起れる妖魔のみと痛議せしと孰れぞや、ルイテルは羅馬改革の至誠を持して、教界の大勢力たる法皇を弾劾したり、マホメットは悪酒に泥酔せるアラビヤ民族の迷夢を覺醒し而して、彼等の凡てを眞の宗教に歸へらしむべく、先づコレイイシユ家を罵りたり、遂に清澄寺を追はれたる日蓮がごとくに、コレイイシユ家を追はる、素より自然の數たる可し。

此で、マホメットは之を最初の序幕として、彼は徐々として、其活生涯を赤血色に潤色す可く、怒濤渦中に入り來りぬ、曾てマホメットを慈しみ曾てマホメットを愛撫せしコレイイシユ家は、今やマホメットを呪咀

し。マホメットを敵り、マホメットを殺害せずむは己まざらんとせり。人事心境の變遷一に何ぞ此くの如く甚だしきや、昨の愛は今の恨也、今の慈は明の憎也、マホメットを育成するに與て大なる力ありし好叔父アブタレブは今やマホメットを迫害せむとするの謀首張本となれり。人事此の如し、情々達觀すれば是れ素より自然の數規而已、一代人心を廓清し、彼等の凡てを惡夢より覺醒し來つて、眞の天來の宗教に歸せしめむとするに於ては、此くの如きは敢て異とするに足らず。マホメットは昔日の好叔父を敵とするを毫も恨まざりき、マホメットは身を遙かなる高所に置き、我を犯すもの、一切を威服せむと欲したり。嗟呼、威服歟、此くの如きに在ては、唯だ夫れ一の威服ある而已。吾人は、世界に於ける有ゆる戰爭主義者の歴史を緝くごとに、恒に恐る可き威權の紙上に耀けるに敬禮を拂はざるを得ず。日蓮は我を犯すもの直に無

間地獄に墮ちむと宣言し、ルートルは我神の上に起てりと宣言せり、是れ限り無きの威權に非らずや、是れ瀆す可からざるの威權に非らずや。今の世、思ふに此かる威權を持するものは莫かる可し、教界に在ても、文學界に於ても。

ルートル時代の羅馬と、今日の我本願寺とは最も威權を没したるの好模型也。靈俗兩界に誇りて多少の勢力は有る可からむも、彼の隻足は地獄の上に起てり、千古の寶典たる教義を説教するの其口は、直に婦女子の唇端を接吻して悦ぶの口而已。言は美にして説は逞しけれど、一代を威服せしむる威權を有せず。否な威權の如何なるものなりや、は、彼等俗僧の到底解する所に非らざる可し。昔者、シ、リーの大詐欺師、バルサモ、不死の秘密を授くと稱して黄金を欺取せしあり、後世は彼にカリオストロの綽名を附せり。今日の本願寺、當年の羅馬、孰れも是カリオスト

而已豈に一宗一門を統一せる大本山ならむや此時に當てルイテル  
出て日蓮出てマホメット出づるも此等の天才は先づ其愛撫する國民  
の爲めに胸を裂かれざるを得ざる可し。

威權の亡滅せる夫れ久しい哉吾人は偶々古人の歴史を繕いて僅かに  
威權の片影に畏敬するある而已此點に於て吾人は惡時代反抗の熱狂  
兒が記録を最も愛讀せざらむとするも禁ずる能はざる也。

ヘネラ山林中より養ひ來たるマホメットが大思想は如何なる彩色を  
施されてコレイネシユ家やメツカ人と奮闘す可き乎之れ見もの也。  
ホメットは今や自己が抱持する戰の福音を傳道むせ爲に怒濤沫立つ  
三萬里の洋上に乗り出し來れり狂風に翻へる赤血色の旗洋上に荒る  
魔王主義の號令嗟吁如何に大なる驚異ならずや彼が十三年奮闘の  
悲劇は今や血痕の淋漓たるコトラン紙上に眩ゆき光を放てり。

### 第四編

#### マホメットの戦争主義及び

#### 戦争主義と天神

上

時代は時代の兒を産めり吾人は自から此嬌語を發して而して堅く之  
を信ぜむとす若し縦に歴史を遡りて新しき太陽が舊き國土を照すと  
とくに舊記を繰り返へすものあらば何人も此一語を事實の上に發見  
せざる能はざる可し。

迦比羅城中朝歌暮絃の音充ち満ちて人は椰子の葉越の春月に長き夢  
を食るとき一代を否定して起ちたるものは是れ千古の偉人釋迦牟尼佛  
に非らずや羅馬の不振漸く其極に達し法皇の脚下著しく腐蝕して又  
昔日の大能なからむとするときサキソニーの二寒僧神の上に起て汝

等の總てよりも強しと絶叫せしもの、是れマルチン、ル、テ、ルに非らずや、紫の衣、緋の飾り、美なる寺院麗なる山門、僧は唯だ權教權門に安じて佛法末世の國土に惡鬼亂れ妖魔躍らむとするとき、我は釋迦の行者也と絶叫して惡魔の如き四大格言を標置し、而して一代を批評せしものは、是れ日蓮に非らずや、彼等は悉く一代革新の張本を以て自から居りしと云へども然れども此かる惡時代は一個高潮なる熱狂兒の出現を促がして歇まざりしものあり、此要求に應じて天降したるものは、是れ即ち彼等也。之を以て吾人は彼等を目するに、時代の兒てふ四文字を冠せざる可からず。

今マホメットに就て視るも、亦爾りアラビヤ民族の悉くが偶像崇拜の惡酒に泥酔して、殆むと自己の將に亡滅の域に道へるをも覺ざる其惡時代は、マホメットの如き高潔にして雄渾熱狂にして至誠所謂アラブ

ツールたる砂漠の兒の反抗を要求して歇まざりし也、マホメットは此要求に應じ、一代の人心に活水を濺ぐ可く、ヘエラ山林中より大思想を授けられしに外ならず、彼は時代の兒也、之を以て最も眞摯に最も天真流露的に、一代を批評し、痛議し、熱罵し、而して一代の人心を廓清するを得たりき也。

世は動もすれば、マホメットの心情に陋劣なる疑を挟み、マホメットを目して『自己の欲情を充さむが爲めに、イスラムを起し、人の世を騒がす偽善者也』と爲さむとす、此等の批評は多くクリスチャンの唇を漏るゝ所なるが如し、然れども是れ大なる誤謬に過ぎず、マホメットが怒濤的の熱狂を渾射して一代の人心を批評し、痛議し、熱罵し、而して之が爲めには自己が活歴史の總てを赤血色に潤色せずば歇まざりし所以のものは、曩に吾人が絮説することく、彼は其母國たるアラビヤ民族

を迷夢中より覺醒して、アダム、ノア、アブラハム、モーガ、エスの宗教に歸らしめむとするに在り。マホメットが抱持し標榜する所は、サタンの如き折伏主義に在りと云へども、其折伏主義の因て來る所は、實に此大精神ならずば非らず。僧侶の身を以てして終身劍を放たざりしクロムウエルを視よ、世の平和主義者——換言すれば平凡主義者——は恐らくクロムウエルの名に接するだにも、尠からず戰慄を催はす可き歟、也人の或る者は此偉人を目してサーペントの權化也とさへ爲すもの有り、然かも七度神に祈禱して『神よ余をして餘儀なくも劍を握らしめよ』と念せしクロムウエルの大思想大精神を認識するもの夫れ幾許ぞや。彼はグレートブリテンの理時潮を排擠し而して大英國民の悉くを新しき太陽の光に浴せしめむには、劍を把て起つより他に好方法を發見せざりし也。一代の批評家となり而して絶えず人心に活水を授與

せむを企圖するものは、時に平凡者流より多少の誤謬を買ふと、到底免かる可からざるものなる可し。日蓮が如きは、殆むど邦國を咒咀し覇府を騒がす悪魔の子也として、各宗に彈劾せられ、幕府に爪彈せられ、國民に咒はれしに非らずや。マホメットが如き、亦到底平凡者流の誤謬を免れ得ざるもの也。然れども此かる妄評月旦は、斷してマホメットを損ずるに足らず、マホメットの眞の光澤は寧ろ此かる妄評月旦の間より、長へに歴史の上に彩色されつるを見る。

吾人は屢々マホメットを嘲弄し強笑するもの、言に接して、宗教上の憎惡心の如何ばかり猛烈なるものなるかに愁鬱せざる能はざるもの也。舊信仰舊宗教舊真理の人の世を誘惑し昏倒し腐蝕せる間に於て、神の使命の一度天降し來て、新なる宗教を樹て、新なる真理を示し、新なる信仰を鼓吹せむとするや、舊教舊信仰の輩は、之を待つにサーペント若

くばモンスタを以てし、有ゆる迫害を爲し有ゆる咒咀を施して、新宗教新真理を窒息せしめむを勉む。古今東西毫も異なる莫し。今日白人の頭腦を支配して現に白人特有の大宗教と誇稱し、殆ど文明國人崇拜の中心點となり居るクリスト教に就て見るも、神の使者即ち平和の福音者たる可きエスは、白哲人の祖先の爲め、十字架に赤き血を染めたるに非らずや、更に降つて、歐洲最近の歴史を緋け、同じく之れクリスト教を以てして尙其舊教徒と新教徒とは、幾回の争闘を経ても毫も感情相和せざるに非らずや、彼の世界の何の國の歴史を閲するも未だ曾て之れ有らざる最悲劇たる佛國の革命を見よ、亞いては英國革命の歴史を見よ、そが鮮血淋漓たるペーソは是れ新教徒と舊教徒の消長史に外ならざるに非らずや、同じく是れクリストの流を汲むものに在て、既に此くの如き悲劇を演ぜざる能はざるもの有り、況むや舊信仰舊宗教を否定

して新なる真理を示さむとするものに於ては、彼は如何にしても大なる他宗の咒咀を買はざる能はざる可し。マホメットが偶像崇拜教徒の爲めに咒殺されむとし、若くば、後世クリスチャンの爲めに偽善者と嘲らるゝもの、吾人は偶々宗教上の憎悪心の發現に歸せむとす、また他に幾許もマホメットを損ずるものに非らざる也。

然るにても、苦痛は人をして益々偉大に益々堅固に、且益々其歴史をして光彩あらしむるものに非らざる歟。日蓮にして若し夫れ、清澄寺法壇上の彈劾、東條の迫害、龍の口の難、伊東、佐渡の流罪、頸の坐頭の疵、辻の説法等莫かりせば、彼の歴史は餘りに平坦無味のものとならむ。クリストは十字架に血を染めしに於て、一層其生涯を光耀あらしめ、後世の同情を濺がしめたり。凡そ此くの如きは、天意在て、偉人の歴史を美はしく彩る可く命ずるものならざるを保し得むや、吾人はセントヘレナの曲線



美わつて、始めてナポレオンの偉大を懐ふこと深し。迫害は皆に其人の歴史を美にするのみならず其人に向て大なる確信と信念とを授くるもの也。古來時代反抗の熱狂兒にして他難に逢遇せざるは稀也。釋迦は在世八年間折伏し、天台は三十餘年傳教は二十餘年、而して彼等には孰れも相當の迫害存したりき。日蓮にして頸の坐頭の疵莫かりせば、彼の確信然かく堅固なりしを得しや否や、ルーテルにして焚殺令のことなかりせば、彼の信念然かく高潮に熱するを得しや否や、吾人借々東西古今の歴史に徴するに、苦難は何れの場合に於ても人を堅固ならしむるの試験石なるが如し。コレイシユ家を追はれたるマホメット、十三年間劍を提げて各所の草に血を染めたるマホメット、此くてマホメットは其抱持する信念を益々堅固にし、其歴史を愈々美にし、而して自己の産物たるコイランをして光彩ある潤色を施さしめ

しに非らずや。如何なる貴金屬も未製品の儘にては光澤なし、一度は嚴格なる琢磨を経ざる可からず、吾人は十三年間の悲劇が、マホメットの歴史をして益々貴重ならしめ、マホメットの確信をして益々堅固ならしめし、恩惠者なるを思はざる可からず、我をして梵天帝釋の龍城に人と成らしめず、漁夫の血統に連らしめし父母の恩を謝せざる能はずとは日蓮が漏らせる警句に非らずや、次ぎに謝す可きは惡王惡國の恩、我にして佛法末世に産れず、惡王惡國の土に産せざらしめば、我は決して釋迦の行者たる能はざりきなる可しとは、亦是れ日蓮が確信也。他宗の憎惡心や彼をして偉大ならしめたる、血痕淋漓たる悲劇や彼をして其の歴史を光彩あらしめたる、此に到て吾人は、マホメットが生涯の悲劇史を最も貴まらず、非らざる也。

マホメットのコイランを閲するに、吾人は寧ろ其血痕の淋漓たるに驚

かざる能はず。コレ、イシユ族の迫害、メツカ人の毒手、此等は、マホメツトの胸を裂て、爲に、コーランをして、赤血に潤色せしめしものなる可し。紅海とペルシヤ灣と、其所に連れる數百里の大砂漠の果てに、緑なる草あり、露の彼を霑すとき、赤き血は葉を染め、砂を染めつるを見む。此くの如き感あるもの、是れ吾人がコーランに接する毎に、抑うる能はざるの情なりとす。此一事既にマホメツトの戦争主義が、如何ばかり猛烈なるかを立證し得可し。マホメツト云へり、皇天、新しく、大道を授けて、吾を限りなく、尊からしめ、死蔭と闇夜より、吾を救へり、故に、我は、感激して、亦之を、我同胞たる、天下萬衆に、傳ふ可き、義務あり。||と。マホメツトが抱持せる一大新眞理と一大確信とは、死蔭と闇夜なる彼の十三年間の戦争に依て、天より與へられしもの也。劍を片手に、或は垢つきし我衣を綴り、我靴を繕ひ、或は辻に起つて、説教し且戦ふと云ふ、死の蔭に幾度か出

入したる其産物たる也。皇天はマホメツト及其産物たるコーランをして、限りなく尊からしめたり。

吾人は今、イスラムの寶典コーランを繕いて、血痕淋漓たるページの内より、其猛烈なる戦争主義を聴かざる可からず。

『神の爲めに戦死せし人は、不死にして、樂園の鳥となり、果物を食ひ得。また自由に飛び得る也。』(第二章)

『幸福ならむには、神を恐れよ。汝に反對する人に、反對し、神の宗教の爲めに戦へ、左れど、自から戦争を求めて、罪を犯す、勿れ、神は、罪人に、幸福せず。』(第二章)

マホメツトは、神の爲めに戦死せし人は、樂園の鳥になると云へり、神の爲めならば、彼は、毫末も戦死の恐る可きに非らざるを、先づ其の最初のページに記せり、而して、其の戦争は、必らず神の宗教に反對するものに

向て餘儀なくも開かれざる可からず更にマホメットは云へり  
 『汝の教に反對して之を拒むものあらば見出し次第之を殺さる可  
 からず何となれば誘惑は戮殺よりも恐ろしきもの也(第二章)』  
 嗟吁其聲の何ぞ痛激にして其命令の何ぞ嚴なるや汝の教とはマホメ  
 ットの教を彼れ自から云ふ也マホメットの教へとはイスラム也即ち  
 マホメットの教を拒むものあらば見出し次第汝は之を殺さる可か  
 らずと云ふ當時マホメットのイスラムに反抗せるもの、總ては偶像  
 崇拜教徒なりき而してマホメットは偶像崇拜教に誘惑する罪を目し  
 て戮殺の罪よりも更らに恐ろしく大なるものと爲したり昔者日蓮は、  
 日蓮に怨をなすものは必らず先づ世間地獄に墮ちむと云ひ我を損ふ  
 國には魔來り鬼來り疫癘旺に流れて井泉は涸れ日月忿て星を降し天  
 神怒て雨を降さす然るのみならず一切の僧侶一切の民族一切の女人

無

悉く法華經の敵となつて其身地獄に墮ちなむと叫びたり劍を持して  
 教を廣めよとは天使ガブリエルが聲也之れを彼の基督の勿れ主義に  
 比せば孰れぞやマホメットは更らに聲を續けて叫べり  
 『若また汝を誘惑するものあらば汝其處に殺るせ之れ不信者の報ひ  
 也彼等を統撫するは神の仁惠也故に偶像教の誘惑をして神の宗教  
 となさじむる迄汝戦はざる可からず(第二章)』  
 『彼等神の宗教に歸らば汝また彼等を敵とする勿れ彼等は既に不信  
 者ならざれば也(第二章)』  
 『人汝に反對せば之を殺せ復仇せよ神は神を罵るものに幸せず汝の  
 ものを神の教の爲めに出し善を爲せ神は善行者を愛すメツカに巡  
 禮せよ神は汝等に接せむ(第二章)』  
 汝を誘惑するものあらば汝其所に殺せとは如何に嚴格なる命令なら

ずや、偶像教の誘惑をして神の宗教に歸らしむる迄、マホメットは戦はざる可からざる也。マホメットまた云へり、

「戦は悲しむ可きこと、されども神の道を妨げ、神を信せず、聖堂より人を追放し、杯することは、神の目に向ては、尙悲しきもの也、而して偶像の誘惑は神の目に向ては尙殺すよりも悲し(第二章)

マホメットの戦争主義に恐怖するものよ、至誠の産物、沈思の賜たるマホメットを迫害する偶像崇拜のコレイシエ族乃至メツカ人等の毒手は更らに恐怖す可きものならずや、更らに戦慄す可きものならずや、毒手に應ずるに毒手を以てす、是れ暴に酬うるに暴を以てするもの、マホメットに何の罪か之れあらむ、

「神の宗教の爲めに戦へ、モゼスの時よりサムエルの時まで戦へ、神がイスラエルに「Talit」を立てしは、異教人と戦ふ爲めなり。|| 神軍

Talitに對せしとき祈りて曰く、我等の上に忍耐を注げ、我等の足を強めよ、而して不信の人民に對して吾等を助けよ、此くて敵に勝ち、ダヒテはヤルハトを殺せり(第二章)

而してマホメットは之れに附言して曰く、

「神を信するものは神之れを暗より光に導き、不信者は光より暗に導かん、彼等は地獄の火の友となり、永久其處に止まらむ(第二章)

マホメットはコレイシエ族を地獄の火より救ひ、暗きより光に導かむ爲め、今劍を握て、自己の歴史を血に塗りつゝある也、

次ぎのページに於てマホメットは更らに左の如く述べたり、

「神の爲めに戦ひしものは、此世にては、妻を愛し、子を愛し、金銀を積上げ、家畜牛馬土地等を自由に得、而して神は來世には尙好きものを與ふ可く用意せり、信深きものは園ありて、水流れ、其處に永久暮し、清淨

の妻を樂しみ、神の愛を得む。(第三一章)

『神の目の前に眞の宗教は、イスラム也。(第三一章)』

イスラムは即ちマホメット教に非らずや、イスラムの爲めに戦ふものは幸也、來世には園あつて水流る、清き庭に、美しき妻と樂み暮しつゝ、神の愛を得むと云ふ。マホメットは此くの如くにして自己の軍に號令し、此くの如くにして戦争の福音を傳へつゝあり。日蓮が所謂法華經の爲めに怨疾を蒙るは幸也、是れ佛に深き縁あれば也、法華經の行者なれば也、我等の成佛は最早や疑ふ可くもあらずと云ひしに比す可し。

『神の教の爲めに戦ひ死せし人は、神は汝の罪を許し、未來に汝に與ふること、此世の如きものに非らず、人は皆な死あり、されば甦りて樂園に入らむ。此の世は短かき旅途に過ぎざる也。(第三一章)』  
甦りて樂園に入る可し、其處には奇香を放つ、薔薇花あり、春月の姿を寫

す、清き流れあり、吾人は蘇りて天の樂園に入らざる可からず、人よ、何せば樂園に入るを得るや、マホメットは直に答ふ可し、神の教の爲めに戦て死するもの也、と、信念の爲めに死す、人は信念の爲めに甦らざる可からず、而して吾人は甦りて樂園に入る人等と共に死を同うせざる可からず。

マホメットは尙コラン中に謠ふて曰く、

『戦決して遁るゝこと勿れ、勝たば利を得む、敗れば死せむのみ。(第四章)』  
死して樂園の人となるを云ふ也。

戦決して遁るゝことを思はざるは、運命を知るもの也、數を知るもの也、安心を得たるもの也、病床に於て死するものを以てするも餘りに最終を煩悶するは、其人の人格を疑はしむるものあり、況むや夫れ身は鮮血の草葉を染めて屍野に堆き戦の庭に在り、戦決して惑ふが如きは神の

意を汚がすの甚だしきものなりとせざる可からず。マホメットは實に左の如く教へたり。

『人若し神に向て如何なれば我を戦に行かしむるや、我に自然の死を與へざるや』と云ふ者あらば、此く答へむ。『現在のプロヒシヨンは少と雖も、神を恐るゝものは未來は善あらむ。汝如何なる人なりども、死は必らず來るもの也。汝高塔の上(第四ラ)に在りとも、來らむ。』  
高塔の上(第四ラ)に在りとも、死は彼等を見舞ふ、寧ろ神の教の爲めに戦い死して、樂園に入るの勝れるに非らずや。

『神の教の爲めに戦へ、難きことを以て他人を煩はす勿れ、自ら爲せ。』  
(第四ラ)

『信者にして傷害を受けず家に居るものと、身及び財を以て神に盡すものとは平等ならず。神素より信者を樂園に導き誘ふと云へども、身

と財とを以て働きし人を好み、名譽を與ふ。』  
『若し戦ふときは、祈禱は短かくとも宜し、雨或は病に由て兵器は解く』

とも用意はせよ。』  
(第四ラ)

コーランの第五章は、吾人に面白き物語を遣せり。一日マホメット、隻手を椰子にかけ、其下に休憩せしことあり、他の人々は何れも遠くへ趣きてマホメット唯一人も、砂漠のアラビヤ人來り、劍を抜きマホメットに肉薄して曰く、我汝を殺さむ。誰か之を禁するものぞ。』とマホメット曰く、神也。』と天使ガブリエル彼の劍を手より撃ちおろしたり。マホメット乃ち其劍を執り、彼に向ふて曰く、我汝を殺さん。誰が我を妨ぐるものぞ。』と彼曰く、誰も無し。』とサンデイ、砂漠の土人遂にマホメットを信するに到りたりと、一些事に外ならずと云へども、また能くマホメットの面目を發露せるものあり。

マホメツトがサンデイ砂漠より養ひ來つたる戦争主義及び其戦争主義とアラトとの離る可からざる關連を有せる次第は、如上吾人のコラン中より摘記し指録せるものに於て、世人の炳かに首肯する所なる可し。彼れ戦を論するや、必らず神を云ふ、是れ尙日蓮が法華經の爲めと云ひル、テルが我神の上に起てりと云ふものと、毫も徑庭あるを見ざる也。

夫れアラトの爲めに戦ふものは幸福なる哉、彼は死して樂園の鳥となり、自由に果物を食ひ、自由に虚空を飛躍し得るに非らずや。マホメツトが戦ふや、決して欲情の爲めに戦へるに非らず、彼はル、テルが獨逸を出て、「サキソニーの一寒僧茲に在り、我茲に在て汝等の總てより強し」と叫絶す可く、ウオルムス議會に現はれしが如く、日蓮が『我を罵らむ人々には愈々申し參らす可し』と咆哮しつゝ、鎌倉幕府の議席に

進みしが如く、將た亦クロムウエルが七度神に祈禱して而して始めて劍戟に身を委ねしが如く、新眞理新宗教の爲めに劍を把て、ヘエラ山下に血を染めし也。マホメツトが一代の眼目とする所はアラビヤ人を偶像崇拜の惡酒より覺醒するに在り、偶像教の爲めに掩はれたる天神の宗教を發揮し、嗟吁大いなるかな、天神を謳ふの外途に他に存せざるを知らしむるに在り、誰か之を偽善と云ふものぞ。

第五編 マホメットの戦争主義及び

戦争主義と天神

下

マホメットが抱持し標榜し發揮せる其戦争主義及び其戦争主義とアラブとの關係に就ては、吾人既に其片影を摘記したり。爾り如上記す所、是れ片影隻語而已、一部のコーランを一瞥すれば、彼が戦争主義を謳ふ聲の寧ろ多きに過ぐるを覺えむ。吾人は尙暫くの時を彼の戦争主義に與へざる可からず。

アール、コーランは、血に染めるマホメットが聲を傳へて曰く、

『オ、メッカ人よ、汝の力に應じて行爲せよ、我汝の不敬を忍び、忍耐せむ。神の命せしことを公示す——我義務を盡さん、人を惡憎するにア

ロフユームなる勿れ、神は之を憎む。(第六ラ)

『神は我を正道に導き、眞の宗教に、アブラハムに導く。嗟、我は祈り、拜禮し、我が生死を神に撃げむ。(第六ラ)』

汝の力に應じて行爲せよとは、汝の能力の儘に行動し、マホメットに反抗せよとの謂也。メッカ人が有ゆる力を傾注してマホメットを咒殺せむとする間に、マホメットは益々自信を堅固にし、其歴史を美にして、天啓的の神秘を後世に垂れつゝあるに非らずや。是れ、皇天親しく大道を授けて我を限りなく尊からしめ、死蔭と闇夜より吾を救へりと云ふマホメットが信念の現實となりたるもの也。左れど如何にメッカ人が咒咀を逞うするとも、苟も宇宙の大能たる上帝にして、之をマホメットに許さむ限りは、マホメットは斷じて自己が發見になれるイスラムを宣べざる可からず、即ちマホメットは其神の預言者たる上に於て、例へば



日蓮が釋迦の再現と號して法華經の行者たりしが如く、神の行者たらざる可からず。『予は皇天の使命に由り、廣く萬人に此說(即イスラム)を示す公けの說教者也』とはマホメットが天下に宣言せる所の活ける言語也。其意志の堅固、其意氣の偉大、其格調の銳利なるものに到ては、洵にルイテル、日蓮と鑄型を一にせりと謂はざる可からず。

『信者よ、汝若し汝の週圍に多くの敵軍來るとも、決して敵に背を見ずること勿れ(第八章)』

「オ、預言者よ、人々を軍に勵ませ。若し汝等の二十人堅忍ならむには、以て敵の二百に對す可く、若し汝等の百人堅忍ならむには、敵の一千に對するを得べし、百人は二百人に、千人は二千人に、若し敵を大殺傷するに非らざれば、預言者たりとも、奴隸を有すると能はざる也(第八章)」

敵に大殺傷を與ふるに非らざれば、如何に預言者たりとも、奴隸を有する能はざる也と云ふ、是れマホメットの魔王主義也。例へばサタンが謀反の旗を荒暴の洋上に翻して、來往する三萬里の奴隸に號令し、新版圖新王國を樹立せむとするの夫に似たり。

「戰終らば、敵を見出し、次第殺す可し。若し偶像崇拜者にして、汝に保護を依頼せば、承諾せよ、而して彼を其家に送り遣はす可し。或は彼れ此宗教(イスラム)を聽くの機あらむ、汝これを爲せ、何となれば、彼は汝の説く所の宗教の美を知らざるものなれば也(第九章)」

戰終るも敵は殺す可し、是れ神の教を咒ふものなれば也、敵にして保護を乞ふものは承諾す可し、彼はイスラムを知らざるものなれば也、是頓てイスラムを聽くの機を彼に與ふるものなれば也、是れ神の仁惠也、神の宗教の仁惠也。

『神の宗教の爲めに戦へ、神及其使徒の外何もなく、友に信あるものは神棄てず』(第九章)

『偶像者は不浄也、偶像者を何月でも襲へ』(第九章)

『神の宗教の爲に戦へ、戦に行け、ダブーク(Habuc)汝は餘りに土地に戀着せり、汝は現世を選ぶ歟、未來を選ぶ歟、現世のフロビシヨンは未來に比して餘りに僅少也、汝神の命ずるときに戦に行かざる時は、神重罰を加へむ、而して汝の代りに他の人を以てせむ』(第九章)

ダブークはメサナとダマエンの中間に在り、ヘシラ九年人口三萬人と稱す。

『神の宗教の爲めに戦へ、炎暑熱し』と云へども、地獄の火は尙熱し』(第九章)

ダブークの戦争は夏時に於てされき、是れ羅馬帝ヘラクリウスに對す

るの戦也。炎暑、土を焦し、人を焦し、劍戟亦た爲めに光なからむとせり。エルヘシラ九年、マホメットの兵殆ど疲れたり、茲に於てか「炎暑熱し」と云ふか、爾り熱かる可し、地獄の火は更に熱し」の叱呵を發して、一軍を鼓舞したりし時の語也。寔にや地獄の火は、炎熱の炎よりも暑し、神意に従はざれば、兵士は直に地獄に墮ちざる可からず。マホメットの叱呵能く三軍を鼓舞するの威嚴ありと謂はざる可からず。

吾人はダブークの戦争に於て記臆す可き美談の存するを忘却する能はず。是は戦争主義者としてのマホメット、戦の傳道者、魔王主義の布教者としてのマホメットを最も露骨に説明すると共に、アラビヤ種族特有の温情をも亦能く發揮せる美はしき物語なれば也。

マホメットが最愛の弟子にセイドなる少年あり、此少年はマホメットが布教三年にして弟子僅かに十三人てふ悲境時代よりして、彼に隸屬

したりしもの也。ダークの戦に於てセード遂に戦死せり。マホメット乃ち曰く、是れ宜しきに適へるもの也。セードは主命を全うして今や其主に近けり、また何の憾か是れあらむ。とセードの女は彼の死を聞き、知して遺骸を祭る可く訪ひ來りぬ。マホメットは彼の死屍を撫して泣けり。彼女曰く、是れ何事ぞや。とマホメット曰く、友其友を哭する也。

と嗟呼、如何に美はしき物語ならずや。セードの死を視て、是れ宜しきに適へるもの也。とはマホメットが標榜する魔王主義より來れる言也。神の爲めに戦ふ、死何かあらむ、樂園の薔薇花のほとりに甦へるは戦死者が天より授けらるゝ唯一の恩恵に非らずや。然れどもマホメットは此少年の赤き血に染みたる遺骸に接しては、尙泣かざるを得ざりき。是れ友其友を哭する也。マホメットが抱持する折伏主義と、其胸底に湧出せる温情とは、如何に此一小些事の上に

發露されたらざるや。塚の上に庵を結び、落葉の腐蝕せる上に靜かに念佛し、死人を埋めたる土の上に眠りて、尙我弟子檀那等を懷ふに堪えざりし日蓮が温情に到ては、到底日蓮を否定するものゝ緬想し得る所に非らず。若し夫れ、マホメットを目して一個冷酷の主戦論者なりと爲すあらば、そはマホメットを誤るの甚しきもの也。彼や怒濤沫立つ三萬里の洋上に大哮喘を試むるの大膽を有したりしと共に、また友其友に哭すの大熱情をも有したりき也。セードが遺骸を撫して哭せし此一條の物語は、恰も怒濤狂瀾の大渦中に一波の春水を濺ぎし夫れにも似て、マホメットが歴史に一異彩あらしめたるを覺ゆ。

尙ダークの役に於て、七人の民來てマホメットに迫り、靴を與へよ、然らずば戦に行くを得ず。と云ふ。マホメット、是無し。と答ふるや、彼等泣て去れりと傳ふ。

マホメットは之をアール、コーラン中に記して曰く、  
 「弱きもの病人等は戦に行かざるを得、戦に行かむと熱心し左れど靴  
 の穿く可き無く止むを得ざる人の如きは、戦に行かずとも笑ふ可き  
 に非らず。左れども富人にして此の如きとを云ふは恥つ可きこと也。  
 (ラコニ章第九)  
 『戦に行かざるものは後に残り教を學べ。(コイラン  
 第九章)』  
 と、マホメットは靜かに記録せり。

此くの如く、コーラン紙上に活躍せるマホメットの戦争主義及び其戦  
 争主義とアラトとの關係は、吾人の絮説を俟たずして世の夙に認識す  
 る所なる可し。マホメットが戦争主義はアラトと離る可からざる連鎖  
 あり、神の爲めと云ふを除いてはマホメットの戦争主義は遂に無意味  
 なるものと化し去る可し。既に神の宗教の爲めに戦ふ、吾人は彼に謝せ

ざる可からざる也。而して其戦の紀念たる血痕の附着せるイスラムの  
 寶典、アール、コーランに對する毎に、吾人は多大の畏敬を拂はざる能は  
 ず。例へば、コーランは、恰かも幾回の激戦を経たる軍旗の如かる可き、歟  
 標章の半ば裂けたる、硝煙の黒く汚せる、裂けたる端には露の朝顔の色  
 の様なる血痕の鮮かに染みたる、孰れか當時の勇ましき激戦を偲はし  
 むるに非らずや、吾人がコーランに對するの情實に此くの如し。而して  
 其血痕が悉く神の兒の血液にして神の宗教の爲に戦へりき人の名譽  
 なる記録なるを懷ふとき、吾人がマホメットを敬ふの情は一層切なる  
 ものあるを覺ゆ。誰か彼を罵り、嘲り嗤ひ、笑ふものぞや。

マホメットは神の預言者也、彼自からが云へる如く、神の使命を行せし  
 偉人也。神無かりせば、彼も亦コレイシユ家と類を同うして偶像崇拜  
 の惡酒に泥酔せしやも未だ知る可からず、彼れ豈に自己の歴史を好む

て赤血色に潤色するの要あらむや。然れども既に神あり、既に神の宗教あり。皇天は新しくヘエラ山中に静坐せる彼に向てレベーションを與え、砂漠の子たる一個の未製の少年を闇夜と死蔭より救ひて、迷夢界に熟醉せるコレトイシユ家を覺醒す可く、劍を授けざる能はず、誰か亦慢りに彼を罵り、嘲り嗤ひ、笑ふものぞ、彼が標榜する戦争主義は、クロムウエルが夫れの如く、日蓮が夫れの如く、時代の要求に依て神の命せしものたるに外ならず。偉人は總て時代の兒也、マホメツト豈に神意に逆くものならむや。

吾人はマホメツトが偶像崇拜教の血統たりしことを信ずるの序を以て、またアブラハムの均しく偶像崇拜の血統に出て、而して能く偶像崇拜の迷信中より脱脚し來りしことを記臆せざる可からず。アール、コラン亦た記せり、

「アブラハムの父も偶像崇拜の一人なりき、或日其地の人々偶像を祀る、アブラハム人々の居らざる隙に密かに室に入り來り、其の内の大なる所の偶像を除く外、悉く是を壊ち去れり。人々歸り來り、驚愕すること大方ならず、一人之を告ぐるものあり、人々直にアブラハムを曳き來り嚴重に詰問して曰く、汝之を爲したる歟。』とアブラハム曰く、否、我敢て之を知らず、恐らく此に残れる大偶像之を爲せるならむ、人々大偶像に問ふ可き也。左れど人々よ、此かる害にも利にもならざるものを信じて何にするぞや、人々之を大偶像に問ふと共に又人々の心に問はざる可からず、而して人々の心の答ふる所、我の偏りに聞き得むと欲するの點也。

偶像は之れ一個の黒き木片而已、到底宇宙を支配するの大能に非らざる也。試に是れに油を濺ぎ、密蠟を塗れ、幾多の虫類は是れに纏附し來る

に非らずや。人々が如何ほど大偶像に詰問するとも、偶像は黙として何等の答も爲さざる可し、而して最後に云はむ、人々の心底に問へと。アラハムの言、如何に高潮ならずや。

寔にマホメットは、アラハムを目して、神の宗教の行者也となしたりき。アール、コランは記して曰く、

『アラハムは、眞宗教の模範也。』(第十章)

又コラン第六章中には、記して云はく、

『アラハム、其父は必らず偶像信者也、アラハム、幼時また偶像信者たらざるを得ざりき、聖書、詳しく云へば、マユトは之を知る……彼は曾て星を拜せし時代もありき、然れども眞の神の存在を認識するに到りしは、天體が變遷する以上は、他に之に命ずるものある可きを確信せしに因れり。』(第六章)

『アラハム、始め星を見て曰く、是れ神也。』と、其入るを見て、之れ神に非らず。』月の出づるを見て、之れ神也。』と云ふ、然れど、月、西の山の蔭に没するを見て、また曰く、之れ神に非らず。』と、而して、日の東に出づるを見て曰く、之れ神也。』と、此くの如くにして、彼は、日月星斗の外に、偉大の神あることを信したり。』(第六章)

偶像崇拜の血統に連りて、而して遙かに高く、此迷信中より脱却す、アラハムは、恰かもマホメットの變形の如き歟。マホメット茲に於てか、アール、コラン中に彼を引證し來て、自己の偉大を立證せむとせり、

『イスラムの外の宗教に由るものは、神に悦ばれざる也、然れども、アラハムの宗教は、正教也。』(第三章)

『禮拜す可き宮は、メツカなることを命ぜらる、其處にアラハムの踏みし靈石あり。』(第三章)

『アブラハム神を信じ、ヤコブ之に繼ぎ、神に其身を任せり。——吾人は、アブラハムの宗教に次ぐもの、吾人は、偶像教を拜せざるもの。』  
 マホメットが十三年間に於ける折伏の活歴史、布教の記録たるコーランに於て、アブラハムを稱揚し措かざるもの、之れ同一境隅に居る同一血統の遂に彼に多大の同情を濺がしめずむば已まざりしもの歟。此くの如くにして、マホメットは、悪魔の片影てふ劍を握るを否まざりき、惡時代反抗の熱狂兒としてのマホメット、惡時代反抗の聲としてのイエラムのコーラン、吾人は、洵に此等の血痕に接して、大なる畏敬を拂はすむば非らざる也。何となれば、彼は神より授けられし使命の實録なれば也。

嗟吁、砂漠の子たる彼れマホメットは、恰かも千古の精華萬代の偉人たる

る釋迦が伽闍尸梨沙山の苦行林より大思想を養ひ來りしが如く、ヘエラ山中の靜坐より神の使命を握り來たりしものなる哉。此に於て、彼は嘗に一アラブノールたるに止まらず、東歐西亞の大主權者の一人たりと謂ふ可し。吾人は、鶯色にして澹紅を帯べる彼の唇端を發して湧出する其魔王主義に、宜しく激感する所なかる可からず、蓋し是れ、後世の吾人が、舊き人に對する相當の敬意なる可し。

吾人は、マホメットの戦ひの聲に就て、最早や多く語らむを欲せず、速かに他のページを繰いて此偉人が側面を視るの甚だ趣味多きを信ぜむとす。然れども尙一事の附記す可きものあり、そは、イズラムに現はれたるアラブ觀、即ちマホメットの造物主觀也。吾人、此造物主觀に移る前に於て、聊か左に『宗教上の感情』に就て一言し置く可し。  
 世に感情の曝發より恐る可きは、莫かる可し、而して感情の曝發は、之を

宗教上に於て爲すより猛烈に激潮に急速たるものは莫かる可し。佛國革命の根本に視るも、英國革命の裡面に徴するも、其大なる泉源は悉く之を宗教上の感情の衝突、信仰の衝突に起因せざる無し。宗教上の悪感情が曝然として漲奔したるの時は、國土一切の草根樹幹を焦盡し去らずむば歇まず、之を以て古來多く革命を敢行するものは、必らず宗教上の感情に點火したり、宗教上の感情は直に以て政治上の感情に迄、類焼を及ぼすを得れば也。國家を根本より改善し、國民の凡をして根底より洗禮せしめむを企圖せば、區々政治は云ふに足らず、須く先づ宗教上の大感情に點火するを要す。佛國の革命も、英國の革命も、泉源は悉く宗教上の感情の衝突に起因したらずや。

マホメット現に偉大の歴史を有し、而して赫々たる耀きを後世に垂るゝもの、彼が能く宗教上の感情に點火して、一代に咆哮せしが故ならず

むば非らず

吾人を以て視るに、世の所謂英雄の多くは、宗教上の偉人が宗教上の偉人たる餘地無うして、自から俗化せしものに似たり。ナポレオンの如きヒスマークの如き、彼等にして身を宗教界に投し、徐ろに信仰上よりして一代を攪亂したらむには、其反響や更に大なるもの存せしなる可く、其歴史や更に光彩陸離たるもの存し、而して世界を揺動し、世界を風靡し、世界を掃蕩せしもの、從て更に大なりしもの、莫くむば非らざる可し。ルイテルや、クロムウエルや、日蓮や、クリストや、釋迦や、マホメットや、世の所謂英雄の事業を徐ろに宗教上の感情より發展し、行きしものに外ならず。ナポレオンが青春の才を以てして、歐州全土を席捲したるもの、大は即ち大快は即ち快なりと云へども、ルイテル、クロムウエルが宗教上の感情に點火せし、の猛烈にして、激甚なるに加かず。



而して彼等の多くは其の點火を辻の説教に於て爲したりき。名越の松葉ヶ谷を始め鎌倉の巷々は日蓮が爲に名譽ある法壇たりき。悪魔の私語のごとき日蓮が破邪の響は陰々たる聲をなして辻の法壇より鎌倉幕府をして恐怖せしめたるに非らずや。マホメットに就て視るも亦爾り當時コレイシユ族を中心とする偶像崇拜教には美なる法衣あり、飾ざられたる法壇あり、之に反してヘエラ山林中靜思の大思想たるイスラムを發揮し教示せむとするマホメットが爲めに世は一の法衣一の法壇だに藉さざりしに非らずや。マホメットがイスラムは恒に辻に於て説かれ、戦の庭に於て説かるゝの外、何處にてか發揮されむ。マホメットは衆前に於て我衣を綴り、我靴を繕ひ、或は群集中に在て、且教へ、且令し、且つ戦ひたりとは、カ、ラ、エ、ルが記する處に非らずや。吾人は之を目して、大なる自然の説教と謂はむ。コーランは即ち荒野の子たる自然

の説教者が唯一の愛見なりき。左るにても辻に於て點火されたる宗教上の折伏主義が如何に猛烈なる響を後世に遺さずや。

吾人は今次ぎのペーシに移らんとするに當りて、最も適切にマホメットの戦争主義を發露せる物語を記して、此一章の終を結ばむ。マホメットが弟子中にアリーと云ひし十六歳の一少年あり、バクダットの禮拜堂に於て暗殺せらる。若き熱き血は紅をなしてアリーの軀を濡せり、アリーの最終に臨むて告げて曰く、創痍若し我を殺さずむば、諸君乞ふ刺客を許せ。然れども若し之が爲めに我死を致さば、諸君は直に彼を殺さざる可からず。是れ即ち彼と我と同時に神前に現はれて、以て其是非曲直を見むが爲め也。と嗟吁如何に痛絶なる此言なるかな。所謂マホメットの戦争主義は此言と此血との上に高く樹立せる也。天使ガブリエルが所謂劍に由て教を廣めよとの玉條も、また當にアリーに依て經驗

されたりと爲さる可からず。

## 第六編 マホメツトの天神觀

惡時代反抗の熱狂兒としてのマホメツト及びマホメツトの戦争主義と神との關係に就ては、吾人既に上來其の片影を説示したり。吾人は直に「マホメツトのアラー觀を視ざる可からず。私かに思ふに彼が十三年間折伏の大産物たるヨーロッパ紙上に散見するものは、是即ちマホメツトがアラー觀なる歟。マホメツトが確信せしアラー、マホメツトが祈禱せしアラーの如何ばかり大能なるかは、アール、ヨーロッパの文字能く吾人に語りつゝあり。

向上的主義は人類が有する美德也、人類が他の動物と全然相異なれる所以のものは、實に此に存す。孰れの國たるを問はず、其の太古の歴史を繙いて人類移動の跡及び人類生活の状態を考察し、而して後靜かに彼

等の精神的發動の如何を一瞥せよ、何の教文も何の學理も發見されざる時代に於て、彼等は不思議なる或ものに繋れて、恒に向上するを禁じ得ざりしに非らずや、夜清かにして椰子の梢に星現はるれば、アブラハム尙且之を宇宙のオールマイテイとして拜禮し祈禱しき、或は大空を神なりと信ぜし部落人もあり、或は大洋を宇宙の大能大勢力なりと爲せし部落人もあり、其の如何は暫く問はざるも太古の人類に在て既に拒絕す可からざる<sup>アナキ</sup>、<sup>メ</sup>主義の把持されたりきは炳かなる可し、是れ即ち人類が宗教心の自然に發露せるものなりと謂ふを憚からざる可し。此くて時代の經過と共に、人類が宗教心は大別して二個の異なる岐路に進みたり、即ち一は宇宙のオールマイテイを以て唯一神の獨占到歸するもの、却クリスト教イスラム教の如き此種に屬し、他は多神教にして偶像崇拜の如き是也、マホメットはクリスト教の所謂ゴットの外

他に崇拜す可き何物をも認めざりき、彼が十三年間の折伏は其本源を實に此點に發したる也。

マホメットは寧ろ偏狹なる迄にアラト全能論者也、彼は一アラトの爲めには人類の凡てを犠牲とするも尙足らずとせり、之を以てマホメットは異教徒に對するに如何なる場合にても劍を持するを否まざりき、マホメット曰く、吾人は神に服せざる可らず、吾人が滿身の熱望は神の吾々に爲す所の如何を問はず、只其聖旨に従ふに在り、現世に於て此くの如く、未來に於て亦此くの如し、神の吾人に賦與するものは其死たる<sup>○</sup>と其死より一層甚だしきものたる<sup>○</sup>とを問はず、是は必らず善たる可く<sup>○</sup>必らず至善のものたる可し、吾人は自から一切を神に擧げざる可からず<sup>○</sup>と、ゲーテは之を評して、イスラムにして此くの如しとせば、吾人は皆なイスラムに従はざる可からず<sup>○</sup>と云へり。

神の爲す所のものは其如何を論せず聖旨に従はざる可からずと云ひ、若くば神の吾人に賦與する所は死たると死より一層甚だしきものたるとを問はず、是は必らず善たる可しと云ひ、更らに吾人は一切を神に攀げざる可からずと云ふ。此片言を通するに於て、マホメットの天神觀は、容易に看取さるゝものあり。

今夫れ、血痕の淋漓たるコーラン一部を閱せむか、戦の庭に於てだも彼が説くを忘れざりし其アラト觀は、躍如として紙上に活きて聲を爲せり。吾人は勉めて之を採録せざる可からず、而して靜かにアラトの威權と大能とを視ざる可からず。

『神は、創造主也、仁惠也、審判の日の王也……恒に助を與へ、恒に人を正に導く。』(第一章)

是れコーラン第一ページにマホメットが自から記せる文字也、審判の

日とは、人生が其墓標の下に入る終極の曲線と共に來る最初の日の謂也、吾人後段に於て、審かに説く所あるべし。

マホメットは神の偉大を謳ふて云はく、

『メツカ人よ、神を信せよ、神は汝の爲めに床の如く地を擴け、天を掩ひ、天よりは雨降らし、汝の食の爲めに果實を作れり……神と均しきもの有り、汝思惟すること勿れ、神は全智也、神は全能也。』(第一章)

『我汝に告げむ、我天地の隱秘を知り、汝の發見する所、汝の隱すところ、

我れ悉く之を知る。』(第一章)

嗟呼アラト、何ぞ夫れ偉なるや、彼は宇宙の呼吸を司れり、彼は風雨を天より降らし、地に果實を生せしむ、而して天地の隱秘を知り、能く人を正に導く、何ぞ夫れ偉大なるや、マホメットはヘエラ山中の靜座に依て、甫て大空を眺めて曰く、我は抑も何者ぞや、人の宇宙と呼ぶ所、我の常に住

むところ、此玄妙の物は何者ぞや、生とは何ぞ、死とは何ぞ、我何を信す可  
 き歟、我何を爲す可き歟、——と又曰く、仰いて、世界を視よ、是れ實に警異  
 に非らずや、天外高く雄飛して無限の蒼窮を掠める大雲は、是れ抑も何  
 處より來て何處に去る遙かに天の一方を眺むれば、偉人の黒魔彼處に  
 懸て沛然として大雨を下し、此死せる土壤を蘇生せむ、而して之が爲め  
 に新緑繁茂し、丁々として聳うる椰子樹、その實を結ふこと累々たり、嗚  
 呼、これ何の作爲ぞや、——と、マホメットは大なる疑問を宇宙に向て發  
 せざるを得ざりし也、時に大雨沛然として到り、忽ちにして燦爛たる星  
 光空に充ち、忽ちにして風起り、忽ちにして偉人の黒魔現はる、此くの如  
 き宇宙、是れ抑も何ものぞや、マホメットの疑問は、先づ此宇宙に向て發  
 せられき、而して其皇天新しく我をして偉大ならしめ、我を死蔭と闇夜  
 との域より救ひたり、——と云ふもの、茲にマホメットが始めて神秘を

破り神のオールマイテイたるを發覺せしの時なりと爲す、彼がアール、  
 コーラン第一ページに於て神の偉大を説くもの、素より其所と謂はざ  
 る可からず。

『神は非常に仁惠也、信者を恵み愛す、汝は神の全能と、天地は悉く神に  
 屬すること、而して神の外助けなきこと、を知らざるか、(第一章)』

こはマホメットがメツカ人に神の在存を説きし最初の言也。

『神は東に屬し、また西に屬す、汝到る所に於て、汝の面を向くれば、其所  
 に神の面あり、神は遍在、全智也、(第一章)』

『ユダヤヤ、人は神は子を産むと云へども、然らず、天地萬物悉く皆な  
 神の子也、(第一章)』

『神を信ずるを證するには、身を苦しめ、饑え、富を先ひ、果物に欠げ、尙此  
 信を有するに在り、(第一章)』

イスラムに苦行あり、斷食の式あり、惟ふにこは身を清淨にすると共に、また信念の深淺を驗する爲のものに非らざる歟。大なる信仰は大なる苦行の産物たらざる可からず。

人はイスラムの放逸を冷笑すると云へども、彼に一日五回の祈禱あり、嚴格なる斷食あり、複雑なる儀式あり、禁酒あり。此等は最も其眞面目なる宗教なるを意味せずや。而してマホメットは自から好むで恒に逆流に掉し、苦難に處して、最も極端に自個の信仰を試験すると共に、其弟子等の信仰をも試験せり。彼がコレイシユ族の迫害の爲めメヂナを始め各處に追ふの餘儀なかりしもの、是れ彼及び彼の弟子に取て、大なる苦難に非らずや。マキアベリ曾て曰へり、兵器を有するに預言者は恒に勝つ。若しモイセ、サイラス、エセウ、ロミユツスも、兵力なかりせば其法を強うすること能はざりしなる可し。——と蓋しマホメットの所謂

兵力なるものは、其布教上の餘儀なき手段なりしと云へども、また遂に劍を把て起たざる可からざりし其の苦難や、彼が信仰をして益々堅固ならしめたる。

『好むで善行をなすものには、神之れを恵む。』(第一章)

『神は一也、仁惠也、天地の創造主也、晝夜の界に於て、海に於て、帆走る船の人に向て、有益なるものを與ふ、雨を降らし、死せる地を濡らす。』(第二章)

『神の教を擴むる爲め、物を出すものは、宛も穀物の如く、一根七穂を出し、七穂毎に百粒ある如し。神の爲めに物を出すものは、神の爲に信を受く。』(第一章)

『汝の胸中のこと、汝の言ふこと、神之を知る、天に在ること、地に在ること、皆な之を知る。終の日、今日爲せし善惡皆な酬はる。』(第二章)

此等は『マホメットと其戒』の部中に記す可きものながら、尙以て神の偉大を證するに足るものあれば、茲に示し置く也。マホメットは此全能なる神に對して、一日必らず五回子女等と共に祈禱を爲せりき。  
『萬物皆な神より來る善は神より來る、惡は汝自身より來る。』(第四章)とは、マホメットの信念なりき。

『神は、其好むものを許し、惡むものを罰す。天地皆な神の物也。』(第五章)

『神の怒る人は、或は猿、或は豚と變ず可し。』(第五章)

『人を土より造り、汝の生命の期限を定め、また甦の日を定めたるは、神也。』(第五章)

『神は豊けく、雨降らし、足の下には、河水を流れしむ。』(第五章)

『神の語は、眞理也。』(第六章)

神は一也、而して仁惠也、天地の獨裁者也、創造者也、此くの如き文字は、コ

ーラン一部中幾許存在するか知る可からず、神は豊けく、雨を降らし、足の下には、河水を流す等の文字は、如何に天真流露ならずや、且つ夫れ神の怒に人は、或は羊、或は豚と變ず可しと云ふ、當時の人々の信念及引例、誠に趣味あるもの也。

要するにマホメットの視たるアラは、クリストの所謂全智全能の夫れに異なる莫かる可し、尙マホメットは、其全能に就て、記して曰く、

『地を蔽ふ獸、空中を翔ける鳥も、汝と同じく動物也。…神は不正を知る、彼に秘密の鍵あり、神は丘上のこと、海のこと、一葉の落つるをも、神之を知る、地上の黒き部分の一土粒も、青物も、乾けるものも、三十神に記しあり、夜汝を眠むらしむるも、汝を目さましむるも、亦た神也。』(第六章)

『神は天地の光也。』(第六章)

『神は祖たる可きの柱にて、罪あるものには雷にて罰し、また他には望を與へ、穀物及果實を作る。』(上同)

此等はマホメットが神の偉大の其全智と全能を謳へるの言也、即アラ  
Iを目して天地の獨裁者也と爲せるの言也、そは恰かも、太古のアラビ  
ヤ人がガアバ堂を以て天地のオルマイテイとなせしにも似たりと  
謂ふ可し、左れどマホメットは如何にして神の存在を知りたる歟、コ  
ラン中に彼れ記して曰く、

『神は人の爲めに朝を造り、また眠る爲めに夜を作る、日月は年を知ら  
しむ、星を作り、暗闇地を行き、海を行き得る爲め……天より雨降らし、  
萬物の萌を出さしめ、畜を作り、青物を作らしめ、穀物は列をなして成  
長し、此くて其實を房の如く垂れしむ、オリ、ブ、柘榴等、其熟する時、そ  
の果物を見よ……神のしるし、此處に在り。』(コラン第六章)

『神は創造主也、神に仕へよ。』(コラン第六章)

天外高く勇飛して無限の蒼穹を掠める大雲は何處より來り何處に去  
る、仰いて世界を見よ、是れ實に驚異にあらずや、——とはマホメットが  
彼蒼を仰いて、大思想に撃れし時の驚嘆也、此くて彼は、宇宙に偉大なる  
主裁者の存在するを認識し、想像し、確信するに到りき、其、皇天我を正道  
に導き我を死蔭と暗夜より救へり——とは彼がヘエラ山中の靜坐と  
ゼムズエム泉の神聖的響音とに依て、與へたる所にして、是れ實にマホ  
メットが神の存在を確信せし天啓の感應なりき。

言ふ迄も無く、マホメットは始め偶像崇拜教の一人なりき、左れど其教  
理の淺薄にして卑近なる、到底饑えたるマホメットをして飽かしむる  
能はず、却て彼をして倦ましめたりき、此に於てマホメットは、其自然の  
兒たる先天的の使命に因り、ヒンスバイヤトす可く自然の偉大なる



教育を受く可かりし也故に自然の偉大に依て神を認識したる彼は自然の偉大よりも遙かに神の偉大なることを想像せざるを得ざりき神は彼著の高さよりも高く神は黒き悪魔の偉人よりも偉大に神は宇宙の偉大よりも尙大ならざる可からず何となれば神は此等の總てを自由で作れるに非らずや其全能全智其大能大智到底測り知るを得じ然れども神は決してクリストに非らずクリストは決して神に非らずアール、コイランは記して曰く、

「神をエスなりと云ふ人は不信者也何となればエスすら曰くオ、イストラ、エルの子等よ神に仕へよ我が主汝が主。」と神は一也他無し。

(第五ラ)

「マリヤの子、エスは唯だ天使のみ他あらむや、エスの母は決して神の母と云はず。彼等に云へ汝は神の外害なく益なきものを禮拜す

るやと。神は視また聞くもの也誤りたる他の意をまた望む可けむや、他人の誘惑に従ふ可けむや。(第五ラ) エスを目して神と爲すは大なる誤謬也彼はマリヤの子のみ天啓の鍵を持して天降せし天使のみ、イノスパイヤートせる高潔なる神の子のみ、マホメットと其差幾許かあらむとは、マホメットが充分自信したるの言なる可し。世人は彼の自尊に高價を拂はざる可からず此自尊此意氣あつて始めて一代の人心を廓清し、悪時潮を排擠して、真宗教眞信仰を鼓吹し、發揮し、傳道し、布教し得るものなれば也。

コイランは尙記して云へり曰く、  
「我れ我意を汝に現はせしこと、ノア、アブラハム、イスマエル、ヤコブ、ヨブ、アトロン、ソロモン等に現はせし如し、又た汝にコイランを與へしこと、ダビデに詩篇を與へし如し。オ、人よ、今に使徒(マホメット)

を汝に贈るを信ぜよ(第四章)  
 『實に、エスはマリヤの子也、神の使徒也、故に神を信ぜよ、神は三つありと云ふ勿れ、神は一也、神は子を有するの比に非らず、天地萬物悉く彼に屬す。』(第四章)

エスも神の使徒也、彼もインスパイヤートせるもの也、此もインスパイヤートせるもの也、彼も天啓の鍵を握れり、我も天啓の鍵を握れり、彼が自由に樂園の戸を開き得る如くに、我も亦自由に樂園の戸を開き得、是れマホメットが我執也、信條也、彼は此確信を以て、イスラムを布教せり、布教しつゝ、彼自身の活歴史を血に染めたり、そは恰かも、クリストが其バイアルを紅にして十字架に血を染めしにも似たらずや、  
 オリゲナス、曾てロゴスをして云はしめて曰く、爾等何ぞ我に祈禱する

や、爾等は唯だ神に祈る可し、我も亦父に祈る也、爾等は聖書に教へられたる如く、爾等の爲めに父の立てたまへる祭司長に禱る可きに非らず、祭司長は爾等の辯護者または哀祈者たらむが爲めに其職分を受けたるもの也、爾等は唯だ父に祈禱す可し、爾等我に在りて新に生れ、天神の靈を蒙り、神の子と呼ばれ、我が兄弟と稱せらるゝに至りたるは、我父より受けたるの恩賜のみ、——と此言は移して以て偶像崇拜者流を警鐘するに足る可く、且またマホメットの眞意を語れるものと稱す可し、世には蛇骨を祀りて之を崇拜し、龍骨を祭りて之を禮拜するあり、孰れが亦偶像崇拜の断片ならざる可きや、此くの如きはマホメットの堪え得る所に非らざる也、  
 以上の如く、マホメットの天神觀は至て高潔也、或は創造主と云ひ、審判の日の王と云ひ、天地の隱秘を知るものと云ひ、遍在、全智也と云ひ、オ

ル<sup>△</sup>マイ<sup>△</sup>タイ<sup>△</sup>と云ひ萬物の來る本源也と云ひ人を土より造りて之に生命を與ふもの也と云ひ其語は眞理也と云ひ天地は其光也と云ふ此等の片言雙語を綜合すれば直にマホメットの天神觀を捉へ得む歟苟も自然の大なる教訓を経て而してアラハの存在を確信し認識す其認識され確信されたる所のアラハは當に自然の大よりも大ならざる可からざる也亦當に自然の高潔よりも高潔に自然の美はしきよりも美はしからざる可からざる也是れ實に理の數なる可し

然れどもマホメットが眼に映したるアラハは必らずしもクリストが眼に映したるのゴットにも是れ非らざる如し亦クリスチャンの眼に映しつゝあるゴットにも是れ非らざる如し

クリストの眼に映せしゴットは如何なる場合に於ても嚴父の如くならず慈母の如かりき之に反してマホメットが眼に映せしアラハは如何なる場合に於ても慈母の如かりき之に反してマホメットが眼に映したるアラハは必らずしもクリストが眼に映したるのゴットにも是れ非らざる如し

何なる場合に於ても慈母の如からず嚴父の如くなりしかの如き感得ばすや此點に於て兩者の天神觀は甚だしき異差あるが如く也吾人今

コラン中より二三を摘記して之を示さむ

「神の爲めに戦死せし人は不死にして樂園の鳥となる云々

「汝に反對する人に反對し神の宗教の爲めに戦へ云々

「神の宗教に反對して之を拒むものあらば見出し次第汝は之を殺さ

ざる可からず云々

「汝を誘惑するものあらば汝其處に之を殺せ云々

「人汝に反對せば之を殺せ復仇せよ神は神を罵るものに幸せず云々

「偶像の誘惑は神の目に向ては尙殺すよりも悲し云々

「神は不信者を地獄に落とす地獄の火は不信者の友となり永久其處

に苦しまざる可からず云々

『神の宗教の爲めに戦へ、炎天暑しと云へども、地獄は更らに暑かるべし。』  
 森嚴にして其言、歩も曲ぐ可からず、其令、毛も犯す可からざるの樂あり、此等の文字の上に起てるアラハは、於戲如何に嚴父の如からずや、『天國を開くるの鍵は直に地獄を開くの鍵也』 『活人劍は即ち殺人劍也』 てふ語は、久しく吾人が聞ける所也、今之をマホメットが神に就て見るに、恰かも斯くの如き鍵若くば名刀を想はせむるものあり、彼の所謂アラハや、恒に血の上に起てり、恒に戦の廷に起てり、恒に怒濤沫立つ洋上に起てり、嗟吁是れマホメットが胸底に存ずる神歟、抑もマホメット化したる神歟、  
 此かるアラハを戴いて、自己の歴史の凡てを血に染め行く例へば、日蓮が、我に恨みを寄するものは必らず先づ無間地獄に墮ちなむ——と咆

哮しつゝ、法衣は裂かれ、血は草を染むるに至りしと、甚だ酷似せるもの之れある可し。

マホメットが殆むど神の凡てに心服せしは、吾人既に之を本編の最初に説きたり、イスラムなる意義を分拆すれば、神に妄信す可しとの義に歸す可し。

『神縱令我を殺すとも、我猶ほ彼に頼まむ、彼を信せむ。』  
 マホメットは實に此くの如く思へり、惟ふに此は既に滅我即ちアンニヒレインジョン、オアセルスの域に達せるものと謂ふ可し、我は唯だ聖旨に従ふに在り、現在に在て此くの如く來世に於て亦此くの如し、神が我に與ふるに死を以てすると、死より甚だしきものを以てすると、其は我の關知する所に非らず、神の贖與するものは必らず善たる可し、吾人は自から一切を神に攀げざる可からず——と、此くの如きものは、是れイス

ラム也而して其イスラムの寶典たるアール、コーランとは如何なるものぞやマホメットは記して曰く、

『コーランは天より下されしもの、是れ人の歩むの方針也、善惡の標準也(第二章)』

『コーランを讀む時は、靜かなれ、心中に神を思念し、謙遜の思ひをせよ、決して高聲に語る勿れ(第七章)』

人若しマホメットのアラブ觀と其コーランを問ふものあらば、吾人は最も簡約なる語を以て答へ得可し、曰く彼が視たるアラブは嚴父の如く威權あり、彼が歴史の賜たるコーランは此嚴父の片影也——と。

### 第七編 マホメットの女性觀

マホメットに對しては、吾人實に研究す可きの多くを有す。例へば『マホメットの地獄極樂觀』『マホメットと其奇蹟』『マホメットと偽善者』『マホメットの教訓』の如き、是れ其重なるもの也。而して『マホメットの女性觀』も亦た趣味あるもの、一ならずとせず、彼が魔王主義の叫びに耳を痛め、其血痕淋漓たる活歴史に倦めるものは、暫く轉じて春風の苦蕩たるが如き、此美はしく、優しき一章に眼を賤ぐ可からむ。戰の庭にも、女性あらば、何と無く優はしく感ずるもの也。況んや自然ネチャーの大なる修養に依て、インスパイアドせる此未製品の偉人、砂漠の子たるマホメットが、怒濤狂瀾渦中に道ひて、而して觀せる女性に接せむことや、吾人一段の深き趣味を持せざる能はざる也。

マホメットの美貌は、世人の夙に傳へ聞ける所なる可し、膚色にして淡紅を含める顔面、炯々として四圍を射るの眼光、其髪は澤ありて長く、其風姿宛然として名流の血統たるに恥ぢず、特に恐れる時に額上に龍起するの血脈は、パシエム家の特相を露はせるものなりと云ふ、資性豪放にして偶々愛すべき嬌あり、貴公子の風姿自から備はり、天地を獨占して高踏するの樂ありきと傳ふ。アラビヤの女性より視たるマホメットは、洵に是れアラブソールたるべく、洵に是れ一代の華精たるべし。

アラビヤは、一夫多婦主義の國也、特に當時のアラビヤは最も此一夫多婦主義の行はれし國也。アラビヤ人を以てすれば、一夫多婦は毫も不徳の範圍中のものに非らざりき。一國の風俗既に然り、マホメット亦た此一夫多婦の實行者たりし也。

昔にアラビヤに於けるのみならず、吾人は印度をも加へて、上古に於け

る一夫多婦教の勢力範圍中のものと目さむとす。何人も印度の古代史を繙きしものは、吾人の言の誤謬ならざるを首肯せむ。千古の聖人君子若くは偉人の其精華を以て目する釋迦も亦た一夫多婦の行者たりしと云は、誰か人驚かざらむや。然れども釋迦が此一夫多婦教の行者たりしことは、没却す可からざる事實なるを奈何せむ。釋迦は年十七、耶輸陀羅を迎えて、其夫人とせり、而して他に蜜利加闍あり、憍曇彌あり、共に釋迦化脱前の妻なりき。此事既に公けなる事實也。當時一夫多婦宗の泉源たるアラビヤに於て、マホメットが一夫多婦宗の行者たりきとて、別に怪しむ可き事態にも非らざる可く、且アラビヤ人が目して不徳と爲さざりしも、謂れありとせざる可からず。

マホメットが最初の妻をカデヂヤアと云ふ。マホメットがヘネラ山中の靜思默考に耽りし時、恒に其傍に侍て、彼を慰籍せしものは、此カデヂ

ヤアなりき。彼が彼蒼を眺めて一大感激を爲し、而して我は神の預言也。——と叫びし時、此言を最初に耳にせしも、此カデチャアなれば、此言に驚き且つ此言に疑を挿みし最初のものも、此カデチャアなりき。然れどもカデチャアは最もマホメットを信ぜしもの、彼が我は神の預言者也。——と叫びしを耳にして、彼女は其最初の驚愕者たりしと共に、亦た最初の信者なりき。カデチャア言て曰く、郎の言誠に爾り。——と、是れマホメットが自信を強からしめし聲に非らずや。マホメットが彼女を愛せし、の過れたるもの、實に此故ならずむば非らず。

マホメットが次の妻を、アエシヤと爲す。カデチャア其年マホメットに過ぎたりき。然れどもアエシヤは歳芳にして、其容貌甚だ美也。若き血は彼女の軀に湧きて、濃紅色の肌は、恰かも花の如し。アエシヤ一日マホメットに問ふて曰く、

『妾は、カデチャアに優らずや。彼女は身寡婦なるに加へて、今や老いて色は褪せたり。郎の妾を愛すること亦た頗る優らずや。』

之に對するマホメットの答、

『否、な々々、然らず。天下何人も未だ我を信ぜざる時、我を最初に信ぜしものは彼女也。全世界中唯だ我に一人の友あり。彼女即ち是れ也。』

青春アエシヤの美を以てするも、マホメットが爲めにはカデチャアを忘るゝ能はざりき。カデチャアはイスラムの最初の信者にして、逆流にありしマホメットに對しては唯一の慰藉者たりければ也。

マホメットは、其一代の風習たりし一夫多妻の慣習を如何に觀せしや、其更に婚姻及離婚を如何に觀したりし乎。吾人は先づ最初よりコーランを繰返して、コーラン中に現はれたる彼の女性觀を視む。マホメットは、美なる少女若き妻を以て天の大なる恵みとなせり。美

にして若き妻と同棲することとは非常なる快樂の極の一なりと思惟したりき。特に此世に在て神を敬することの厚きものは、甦て樂園に赴き、薔薇花薫ずる小流の畔に若き美しき妻と永久に樂むを得む。——とは、マホメットが恒に弟子等を慰めたりき所なりとす。

『汝等善行を爲せ、來世は樂園に於て自由に果物を食ひ得、また貞節堅備の妻と樂むを得む。』(第一章)

『信仰深きものは園ありて水流れ、其處に永久暮し、清淨の妻を樂しみ、神の愛を受く。』(第二章)

即ち美はしく若き妻を得ることは、汝の信仰の報酬也と爲したり。從て美はしき若き妻なるものを得ることは、男性の最も大なる希望の一となせりき也。信仰深きものには、神、來世の樂園に於て之を與ふ。汝等はイスラムの信者たらざる可からずと、斯くの如きものマホメットが言な

りき。

然れども、一夫多妻教の弊に到ては、マホメットが堪ゆる所に非らず。當時、少しく名流の門閥に在るものは、八人九人十人の妻を有し、其多數の妻を有するを以て、他に誇らむとするの風習あり、マホメットは之を制限せむと欲して、而してコーランに記して曰へり、

『神は汝等に此く告げつゝあり、孤女に對して、妻として、一樣に當り侍遇することの出來ざるを恐るゝものは、汝の好む他の女の二人三人四人までは婚姻することを得。』(第四章)

如何に美はしく且つ若き女ありとも、四人以上は決して婚姻す可からずと爲せり。今日を以て云け、四人の妻既に多きに過ぐ、當時一夫多妻の弊の極度に達せりき時に在ては、尙是れ大なる制限に該當したりしを知る可き也。釋迦の如き、また三人の夫人を有したりしとは、吾人の前



良法

に一言せる所也。

『若し妻を離縁せむと欲せば、四ヶ月間考ふ可し。若し妻を離縁せぬ様ならば、神は恵み深し。若し離婚に決せば、神は之を知る。離婚されし女は、月経三度あるまで待つ可し。女は之を隠す勿れ。若し仲直りせば、神は正しく受けむ。』(第九章)

『汝は妻を二度まで離縁し得、若し再び婚するるときも、和を旨とし、若し去る時も人情親切を以てせよ。』(第二章)

○『若し三度去る時は、夫は其婦が今一度他人の妻となり去るに非れらざれば、婚し得ず。』(第二章)

離婚せむと欲せば、四ヶ月間これを考ふ可しとは、能き教訓也。三度妻を去るときは、其妻が他人と婚姻し了る迄は、男は他の女と結婚するを得ずと云ふ、云ふ迄も無く、男子を制縛して而して離婚の妙からむを欲せ

るの訓なる可し。

マホメットは此くて一夫一婦説を勧めて云へり。

○『汝若し多くの婦に對して公平なる能はざれば、唯だ一人の女と婚せよ。汝の得たる婢と婚せよ。婢は常人の女の如く、多くの送り物、多くの供給を要せず、故に婢は多く有り得べし。』(第四章)

妻とは如何なるものぞ、マホメットは説いて曰く、

『妻と夫とは互にコンフオートにして、彼等は爾に向ての衣裳也。汝は彼等に向ての衣裳也。』(第二章)

と云へり。

女に對しては、

『女を敬せよ、女より汝生れし故。』(第四章)

同じく是れ結婚なりと云へども、偶像教徒との結婚は、マホメットの徹

頭徹尾禁せし所也。マホメット曰く、  
 『偶像教の女に婚す可からず。ヨシ彼れ汝を悦ばすも下女の信者たるに若かず。故に彼女我宗教の信者となるまでは婚す可からず。また女を不信者に與ふる勿れ。寧ろ信者たる僕に與ふるに若かざるあり。』  
 (第二章)

偶像排斥の主義は結婚の上にて發揮され來れり。如何に女汝を悦ぶとも女にして偶像教徒なる以上は汝は寧ろ我宗教の信者たる汝の下女と婚姻するに若かずと云ひ。また其娘も偶像教徒に與ふ可からずと爲し彼等に與えむよりは我宗教に忠實なる汝の下僕に與へよと云ふ。異教排擠の主張餘蘊なく發揮されつゝありと謂ふ可し。  
 『女を愛せよ』とはマホメットが言へる所也。然れども男子は恒に女子よりも上權に坐せざる所ならず。クリストの男女同權を唱へたるに比し、

日本女子報  
 優越者男子  
 劣弱者女子  
 白村三  
 大塚

此點に於てマホメットは男尊女卑説に傾きたりき。

マホメット曰く、

『妻は夫が能くならず如く、夫に對して能く身持ちせよ。左れど、男子は婦に對して恒に上權を有す。』  
 (第二章)

是れ即ち男尊女卑説也。

マホメットは尙記して曰く、

『男は女より勝れり、神は實に此く作れり。』  
 (第四章)

一夫多婦既に炳かに男尊女卑を意味す。女は恒に男子の保護の下に生涯を送らざる可からず。——とはマホメットが會て言へる所也。然れども女果して卑む可き歟。是れ然らず。吾人の茲に云ふ所の女卑の二字は唯だ夫れ男尊の二字に對するの文字なるのみ。マホメットは女を愛す可きものなりとして左の如くコーランに記せり。

『汝死する時などは、妻に一ヶ年の生計の用意をせよ。』(第二章) 而して男子の死に對しては、他に妻に要求せる所無し。是れ全然女子を目して弱者なりと思惟し、断定せるの致せるものなる可し。既に弱者也、其權利は自から男子に比し弱者たらざるを得ず。凡そ强者には强者の權あり、弱者は恒に其强者の保護の下に立たざる可からず。强者は恒に弱者を憫み愛せざる可からず、弱者と强者との地位、資格、此くの如く差異あり、男女決して同權なる可からず。マホメット亦此くの如く觀せる也。

マホメット更に記して曰く、

『妻を愛せよ、能き衣着せよ、親切に彼女と語れ。孤女を驗し能く宗教に従ふ様に育成せよ、而して婚姻期迄、即ち十五才より十八歳に到る迄をアラビヤにては女の婚姻期とせり、彼等事を處理し得るに至

らは、彼等に多くの能きものを供給して、浪費なき様、彼等を監督せよ、又或は親族の死せしとき、遺物は男女共に之を受く、然れども女は男の二倍也。』(第四章)

弱きものは多くの慰めを與へられざる可からず、然れども敢て自から進むで取るを意味せず、唯だ夫れ强者より與へらるゝ而已。

マホメットが女に關して、アール、コラン中に記せるもの尙甚だ多し、今少しく摘示せむ歟。

『女若し姦淫、或は私通するときは、四人の證人にて證し、獄に繋ぎ、死する迄存せしむ。』(第四章)

姦淫私通を以て、女性の一大罪惡と爲せるもの也。女性は由來、節操を以て、其最高の美となせるもの之を以て、節操を犯すの罪は、他の大なる罪惡よりも、大ならざるを得ず。是れ何の國に在ても爾り。マホメット茲に

於て、四人の證人にて證したる上、獄に繋ぎ、以て死に至らしむ可しと云ふ。恐らく此かる酷刑を加ふるも、尙其罪を償ふに足らざる可き歟。從て、男子の處女を姦するの罪、また大ならざるを得ず、女の私通すると、男の強姦すると、其罪惡の重且大、殆むど相對せるものなるが如し。

マホメツト曰く、

『偶像を信ずる勿れ、淨き女を姦すること勿れ、孤子の産を破る勿れ、父母に不順なる勿れ。』(第四章)

即ち、淨き女を姦するの罪を目して、偶像を信ずるの罪に次ぐと爲せり。何となれば、一度姦されたる處女は、生涯その汚點を洗ひ落す能はざれば也。

アラビヤの惡習として、其夫死すれば親族は其婦を得るの權ありと爲し、婦の意思如何に關せず、強制的に壓して婚し、或は婦のダマールを取る

ことあり、而して他に婚せしめざることあり、是れ一種の強姦也。マホメツト之を否認して曰く、

『眞の信者よ、彼の意思に違て、女の後繼ぎとなる勿れ、また彼女が他に婚するを妨ぐる勿れ。』唯だ夫れ親切にして去らしめよ。(第四章)

マホメツト尙コラン第四章に於て説いて曰く、

『正直の女は、從順にして、夫の留守の中も能く注意せり、何となれば、神は女を男の保護の下におきて保護せしむるを以て也、若し女頑固不順のときは、打ち訓しめ得ざれば、然る可き書を與ふる勿れ、若し女從順なるときは、争ひの緒を求むる勿れ、神は高大也、若し不和あらば、相方の親族より人を撰み判ぜよ。』(上同)

『夫婦仲直りするは好し、仲直りは離縁より善也、男子は自然自己的なりと云へども、若し婦に親切にして女を憎むことを恐るゝものは、神

見たまふ。汝、縦令、多くの妻に等しく當ることを學ぶとも、汝は決して等しくする能はず、必ず或一人を最も愛す可し、縦令一人を愛すれば、とて他を嫌ふ勿れ、尙正義を行へ、又彼女を自由なきものゝ如くする勿れ、若し妻を悪しくせぬものには、神恵を與へたまふ。(同上)

夫婚間に於ける情を説けるもの也。

マホメットの女性観は如上の文字の上に、炳に發露され居るを見る可し。マホメットは當時の習慣たる一夫多妻主義を絶對的には非認せざりしが如し、爲し得べくむば四人を制限とす可し、爲し得べくむば三人二人を制限とす可しとは、彼の心情也。

マホメットが理想の女は、美しく、優しく、而して若き天女に在りしが如し。そはマホメットが屢々コーランに於て説ける樂園の美女に依て之を想像し得らる可し。薔薇花の咲き亂るゝ小流れの畔、美はじく若き妻

は、汝と共に永久に楽しむ可し——とは、マホメットが其弟子等に云へる所也。マホメットが描ける理想の美人は是れなりし如し。然れども、此くの如き美は、實在に於て餘り得らるゝものに非らず、美なる女の多くは其心事、其素行、大概は汚れ居るもの也、而して徳操は却て醜女に在り。茲に於て理想の女と實在の女とは、自から其趣を異にせざる可からず。マホメットは能く此區分をたて、實在の妻としては決して美人のみを稱揚せざりき。

マホメットはまた非常の平民主義を有したりきが如し。そは彼の教訓を見るものゝ何人も肯く所ならむ歟。大凡そ世の逆流に起ち、恒に世と戦はざる可からざる薄幸兒は、勢ひ其不平心の爲め、非常の平民主義者とならざる能はず。マホメット亦た實に然りし如し。

彼が鬱勃たる胸底に有する平民主義は、彼の女性觀上にも發露されつ

るを視可し。マホメットは屢々其婢と婚す可きを云ひ、また屢々其僕と婚す可きを説きたり。而して其理由の主要は、彼れ汝を愛す可し、彼は最も汝に忠實なるものなる可し。——と云ふにありたりき。是れ豈に現著なる平民主義に非らざるや。

権門名流の子女は、動もすれば権門名流てふ浮世の僞譽の奴隷にして、唯だ夫れ権門を誇り名流を誇るもののみ。遂に良夫に忠實を缺げる也。遂に意思の堅固を缺げる也。遂に破操たるを免れざる也。浮世の逆流に掉せるマホメットを以て視れば、是れ抑も何の妻ぞ、何の子女ぞ。此かる女を妻とすること、一生涯の不幸たる可き也。寧ろ好良なる家庭を組織し、生涯を和氣霽々たる間に暮さむと欲せば、宗教を同うし、氣風を相互に感染せる下婢下僕と婚姻するの遙かに勝れるに非らずや。

嗟呼、是れ非常の平民主義也。権門名家を刺激するの平民主義也。権門名

流の子女は、如何に美なりと云へども、マホメットが欲せる所に非らず。彼は寧ろ下婢の薄黒く汚けたるを愛し、身は是れ繚纏に包まるゝとも、心は大空の廣きよりも廣く、高天の高きよりも高きと爲す。既に是れ平民主義の聲也。また將に偉大なる人の聲也。此かる平民主義が、今を去る一千五百年の太古に於て、アラビヤのサンディ沙漠の荒暴たる畔りに響きたらむとは、誰か之を思惟す可きぞ。

第八編 マホメットの地獄極樂觀

極樂は、春月の恒に花に酔へるが如く、地獄は、焦熱の火の絶えず燃え居るが如しとは、世人の何人も想思する所也。釋迦の地獄極樂觀も、クリストの地獄天國觀も、マホメットの地獄極樂觀も、亦た之に外なる能はざる可し。然れどもマホメットが如何なる文字の上に其地獄極樂觀を發露したりきかは、之を研むる上に於て甚だしく趣味を覺ゆるもの也。若し、人生の苦樂の存する地點を、最も簡約に示せと云ふものあらば、マホメットは左の如く答へむ。

『樂土……快く美なる園に、清き水の流るゝところ。』(第四章)

『苦境……地獄の火の燃ゆるところ。』(第四章)

マホメットが地獄極樂觀は、必竟此二個の定義を布演せるものに外な

らず。

然らば即ちマホメットが布演せる地獄は如何。

『地獄には大熱と大寒とあり、而して悪人は永久そこに止まらざるを得ず。』

『地獄は七段に別る。第一、神の意思に反き、神に對して悪行ありしもの。第二、ユダヤ人の爲め、第三、ヤン教徒の爲め、第四、サヒアンの爲め、第五、マチ徒、第六、偶像教徒の爲め、第七、最下の處は偽善者……面に信仰を装ひて、心中無きもの。』(第七章)

佛教にては地獄を別ちて八大地獄となせり、而して其最底地獄は無間地獄也。

彼七段の大熱大寒の地獄に墮つ可きは、以上七段の悪事を働きしものなるが、マホメットは尙アル、コトランに説いて曰く、

即ち大熱地獄

『イスラムを信ぜざるものは、如何程現在に於て幸多くとも、幸は夢の如く消え失せて、審判の日、大熱の地獄に落つ可し。』

地獄は夫れ此くの如し。然らばマホメットが示せる極樂は如何。

極樂には、恒に花薫り、月鮮かに、快樂のみ存して、苦痛在る可からざる也。『極樂は、アダムの追はれし所とは異也。世上には無し。第七天の上。に在り。神の下に在り。其所は、小麦の粉を以て敷かれ、其上に紅白の花を以て飾らる。其壁は眞珠にて、或は金銀にて飾られ、樹の幹は悉く金也。就中最美なるはツウバア(Hiba)と云ふ樹にして、幸福の樹也。此樹には、石榴、椰子、葡萄等、其他美味なる果實、顆多稔れり。其美味云ふ可からず、大なるもの也。』

『果實、鳥肉、望むものとして得られざるは莫し。』

『極樂は、美なる果實と麗はしき花と優しき天女と自由と幸福とを以て充さる。』

『果實を得むと欲するとき、枝自からたはみ、手に來る、獸は休む可く置かれ、美はしく飾らる。』

『水の多きことは極樂の樂しき事、極樂には絶えず自然の賜たる清き水流れつゝあり。此水、此川の、水は、或は水、或は乳、或は酒、蜜等に自在に化す。汝が欲する儘に自在に化す。皆なツウバア樹より出づ。また生命の河あり、其他小泉、小流あり。』

極樂には、不斷の花あり、不斷の月あり、不斷の果實あり、不斷の清水あり、而して不斷の樂あり。山水に一の濁無く、蜜を欲すれば蜜直に來り、酒を欲すれば酒直に來る、人に邪なくして、溫情あり、醜無くして、美あり。洵に是れ樂土なる哉、樂園なる哉。』



マホメットは此極樂を説くに恒に小泉、小流、清き水等の語を以てしたり、炎熱焦土のアラビヤ、砂漠の民族は、何物よりも先づ冷たき清き水を希望せるなる可し。之を似てマホメットは、極樂に此清水の不斷に流れつゝあるを云ひし也。嗟呼、如何に樂しきは、來世の極樂ならずや。

左は云へ、美なる花、美なる月、淨き流れ、淨き園、是れ美は即ち美なりと雖ども、未だ以て極樂の其の樂と快とを説明し盡すに足らざる也。極樂には更らに汝等に取りて、美しく優しきもの、接めるを知らざる可からず、何ぞや、繪の如き美人也。

マホメットは、コランに於て之を説いて曰く、

『以上のもの、美は即ち美なりと云へども、其美は、他の美の爲めに、光を奪はる、樂園の美女也。此女、黒き眼あり、此女と共に生活するは、信者の最大の快樂也。此女は、人間の如く、土塊より成らず、全く女性の純なる』

もの也。人樂園に至るや、美少年走りて、未來界の定まれる妻に報す。二天使來り、樂園の花を與ふ。また指環を與ふ。指環は其樂の記號也。

樂園の美女、是れ天女也。其美にして優しく、且つ若き、正に是れマホメット理想の美女に非らずや。而して是れ男性が如何なる時代に於ても、理想し、夢みつゝあるの美女に非らずや。此かる美なる若き女は、自然の景色の最も優美にして、清淨なる月花園中に在て、爾の手を執り、爾に接吻するに非らずや。極樂に赴くもの、如何に幸多きよ。

彼等の幸は單に是れのみにして、歇まず、彼等は大なる自由と、大なる權利とを、神より授かる可し。コラン記して曰く、

『未來に於ける幸福は、望みしに過ぐ、最も小なるものすら、八萬の隸奴、七十二の妻、樂園の女等あり、此世の妻の外に……更らに此世には禁ぜらるゝ酒もあり、肉類も豊也、衣服は食の如く美にして、悉く絹也、金』

銀珠玉をちりばむ。  
 於○戲○是○宛○然○帝○王○之○域○也○最○幸○福○之○小○乃○以○之○尚○且○八○萬○  
 の○奴○隸○と○七○十○二○の○妻○を○自○由○に○す○る○の○大○勢○力○を○有○す○る○に○非○ら○ず○や○若○  
 し○夫○れ○幸○福○の○大○な○る○も○の○に○到○て○は○殆○む○と○算○す○可○か○ら○ず○。  
 マ○ホ○メ○ツ○ト○が○美○に○し○て○若○き○女○を○有○う○る○快○樂○の○極○致○と○爲○し○た○り○し○事○實○  
 は○以○上○の○文○字○を○通○し○て○容○易○に○認○識○す○る○を○得○可○し○敢○て○マ○ホ○メ○ツ○ト○に○限○  
 ら○ず○人○生○何○者○か○美○に○し○て○青○春○の○熱○き○血○液○の○白○肌○を○順○環○せ○る○麗○艶○の○小○  
 女○よ○り○美○な○る○も○の○を○欲○す○可○き○男○性○の○快○樂○が○此○く○の○如○き○若○き○妻○と○同○接○  
 す○る○に○あ○る○は○云○ふ○を○俟○た○ず○マ○ホ○メ○ツ○ト○は○最○も○天○眞○流○露○に○自○己○の○希○望○  
 と○理○想○と○を○コ○ー○ラ○ン○中○に○描○き○し○也○。

クリストは、死后婚姻無きを説けり、マホメットは、然らず。自然の子にして自然の懐に養はれたる未製品の偉人は、其自然に發育せる情を有し

て、熱き戀情を女性に向て寄せたりしが故なる可し。

然らば、如何なる人が此かる天國の樂園に甦りて無窮の快樂を得能ふや。是れ素よりイスラムを信じ、神を信じ、而してコーランを人生善惡の標準として、恒にマホメットに従ふものに限るや論なし。

マホメットは、貧人は富人よりも五年前に此樂園に入るを得可し、樂園に甦れるものを見るに多くは貧人也、地獄にあるものは多く富人也。

と云へり。是れクリストの所謂貧しきものは幸也、そは神の教を聽き得れば也。——と云へるにも對比す可き歟。

天國に赴くものは、凡てマホメットの教訓を守て之を實行せるもの也、偽善を最も憎くむもの也、偶像を否認するもの也、而して神を恐るゝもの也、コーラン第三章には記して云へり。

『神を恐るゝものは、悦びの國に住まむ、而して過ぎ去る世界に在りし

時よりも大なる樂を授からむ。  
と寔に然かる可し。

夫れ地獄と極樂此くの如く大なる苦樂の境を異にし而して千億里の隔てを有すと云へども其隔ての壁や僅かに一重のみ。

「未來に地獄と極樂との間に壁ありて堺す地獄のもの極樂を見て曰く水を濺げ(第七卷)

蓋し地獄は火の燃ゆる所にして其處に水を需むるの聲充ち居れば也。又曰く

「地極と極樂との間に壁あり餘り高からず互に語り得(上同)

と此くて地獄のもの、苦痛をして、一層酷ならしめむと爲せしものな

らむ。  
マホメツトが地獄極樂觀は即ち此くの如し而して人は何の日に於て

地獄に落つ可く何の日に於て極樂に甦る可く宣告さるゝや何ものが之を命ずるや。

云ふ迄も無く審判の日に於て宣告さるゝ也而して審判日の王は即ち神也。

マホメツトは番にコレイシユ族及びメツカ人に對する時に於てのみならず其弟子に對する時に於ても審判の日を語るを忘れざりき審判の日は彼が説教に於て唯一重きを致されたりき也。

審判の日とは何ぞや吾人が死の里程標に着する其最終の日を謂ふ是れ吾人に取て實に容易ならざるの日也而して神に在ても亦容易ならざるの日也神は審判の王と爲て總ての人を赤裸々となし此くて其人の罪を定めざる可からず。

「審判の日信者は樂園に行く神近きに住し善の園に在り悪人は永久

に苦を受く。…樂園は花やか也酒呑みても頭を害せず理を亂さず、果實鳥肉望みの儘也且つ樂園の處女側に侍す是れ現世善行の報酬也女は直に處女となる樹には刺なし而して樹蔭の流あり果實稔る地獄は黒煙立ちのぼり焼ける風あり冷しき事無く快も無く火を注かれ熱湯を呑む(第十一章)

又曰く

『未來には樂園あり酒ありて頭を害せず樂園のツバーシャンあり目黒く頰美はし(第十章)

思ふに熱帯地方の人種は豪飲の癖あり而して多くはアルコール性甚だ強し之を以て腦を害すること大なるものありマホメット即ち天國の酒の決して腦を害せざるものなるを説きしものなる可し。又曰く

『終の日は人の行爲を計量すること速かなる可し善行のものは重

く幸福ならむ輕きものは悪行せし人も心を失ひし也(第七章)

マホメットは審判の日のことより更らに未來説に亘りて曰く

『不信者等は云はむ未來甦生等は古來の物語のみ——と左れど彼れ一度地獄の火の上に置かるゝに至らば神よ速かに我をして此世界に歸らしめよと願ふに非らずや此くて再び此世に歸り來るを得る乎彼等の偽善と悪行彼等の約束することは眞心より出づるに非らず一時の危急を遁れ免れむ爲めの方便に過ぎざるが故に縱令彼等此世界に再び送り返へさることあるとも決して善なる能はず神より禁せられしこと尙之を改めず更らに偽の人とならむ而してまた云はむ未來は在るに非らず唯だ現在ののみ故に吾人は甦生すること莫し——と左れども汝若し彼等が審判の日神の前に起ち居

るを見れば、神は必らず此く彼等を審問す可し、汝今此に来れるに非らずや、汝神を信ぜざりき、其報として罰を味へ。——と來世に於て神に逢ふこと無しと云ふ人は、偽りの人也、而して彼等云はむ、吾等生存の時に於て惡を行爲せり——と、而して重罰を荷はせらる。然るに彼等之を理解せず、不信者は漫りに神のしるしを疑ふ、多くの預言者の以前に送られしことを信ぜず、汝等穴より地底に突入り、また梯子によりて、僅かに天に登り、以て神のしるしを求むとも、既に是れ無益也、神は注意して聞くものには、能く答ふ、神は靈驗を下す、左れど人悟らず。

(コ17章 第六節)

こは神の存在と、未來の存在と、審判の日の存在と、預言者の存在とを示して、コレイシユ族の迫害を痛罵せしもの也。

マホメットが如何ばかりコレイシユ族の迫害する所となりしやは、

歴史の詳しく吾人に語れる所也。マホメットは遂に母國に居る能はずして、他國の小麥に饑を凌ぎ、果てはメヂナに遁れたりしに非らずや、偶像崇拜のアラビヤ人が眼には、神無く、天國無く、預言者無く、從て亦審判の日無し。カリシヤのハラクラアスの王冠も、波斯のコスロースの王冠も、我に在て何爲るものぞ、亞刺比亞の首長と成て手に鍍金の木片を握らば、以て人生のサルベーションを得たりと爲す乎——と云へる如き大なる宇宙の私語は、到底惡酒に泥酔して心身を亂せるコレイシユ族の窺ひ知る所に非らず、彼等が認め得るは、實在の金のみ實在の王位のみ、實在の神のみ、黒き一個の木片のみ、此くの如きに在て、神何爲るものぞ、天國何爲るものぞ、預言者何爲るものぞ、審判の日將亦何爲るものぞや。

マホメットを以て見れば、コレイシユ族の如きは、審判の日に於て、最

も甚だしき神の痛責に逢ひ、而して地獄中の最低地獄に陥る可きもの也。彼等は偶像を崇拜せり、彼等は神の使者を迫害せり、彼等は偽善を爲せり、彼等は諸ろの罪を犯せり、神は審判の日に於て彼等の罪をさばかざる可からず。

マホメツトは此かる信念を以て、審判の日の甚だ容易ならざるものなるを説き示しぬ。汝如何なることをなすとも、審判の日は遂に汝を見舞はざる可からずとは、マホメツトが叫べる言也。思ふに現在は悪魔の争闘を擅に爲せるの時代なる可し、悪は悪と闘ひ、魔は魔と闘ひつゝあり、善と云ひ真と云ふ、孰れか偽善偽真ならざる可きや。審判の日に於ては、共に是れ地獄中のものと化し去り、誠の善のみ、獨り天國に送らるゝを得む。

マホメツトが持する威嚴は、此地獄極樂説及び審判の日を説く上にも

發揮されたり、頑迷不靈なる汚世に落むには、須らく威服を以て人生濟度の必要條件と爲さざる可からず。一方に笑みを以てすると共に一方に怒を以てせざる可からず、左手に經文を示すと共に右手に劍光を以てせざる可からず、温情と威權と併せ示すに非らずんば、人の世は到底濟度す可きに非らざる可し。

左ればにや日蓮は、一面法華經を誦するの口を以て、他面權門權教の輩に有ゆる痛罵を加ふるを敢て躊躇せざりき。蓋し折伏は、人生濟度上の必要條件也、毀らむものには益々申し參らせ拒まむものには彌々傳へざる可からず、此威權あつて始めて、人を威服せしむ可し。今マホメツト、折伏の本義を奉し、コイランと劍とを併せ示しつゝ、イスラムの布教に従ふ、彼の向ふ所、血は草を染め、歴史は潤色さる、彼や威服を擅にせむとするものに非らずや。

彼は神の爲めの戦を説きたり、而して女性に對する温情を説きたり、戦を説くには汝に反くもの、總てを發見次第殺す可し——と云ふ是れサタンの聲也、左れと女性に對しては彼女を愛せよ——と云ふ是れ天童の聲也、地獄極樂説に就て見るも、マホメツトは極力地獄の火を説き、地獄の苦痛を説くと共に、極樂の花園を説き、清き流を説き、美女を説けり、是れ既に活人劍と殺人劍とを併せ提げて、怒濤洋上に睥睨するもの也、是れ既に信仰の本義を標章して、不信仰の人界に折伏を試むるもの也、是れ豈に威服を擅にせむとするものに非らずや。

第九編 マホメツトの教訓

イスラムの本義は神に對する服従主義也、神の授くる所のものは其死たる◎と◎死◎より◎一◎層◎甚◎だ◎し◎き◎もの◎た◎る◎と◎を◎問◎は◎す◎至◎善◎な◎る◎も◎の◎也◎吾◎人◎は◎總◎て◎を◎神◎に◎撃◎げ◎さ◎る◎可◎か◎ら◎ず◎——と◎是◎れ◎イ◎ス◎ラ◎ム◎の◎根◎本◎教◎義◎也◎何◎と◎な◎れ◎ば◎神◎は◎オ◎ル◎マ◎イ◎テ◎イ◎な◎れ◎ば◎也◎全◎智◎な◎れ◎ば◎也◎宇◎宙◎の◎呼◎吸◎者◎な◎れ◎ば◎也◎火◎の◎如◎き◎地◎獄◎も◎花◎の◎如◎き◎天◎國◎も◎黒◎雲◎の◎偉◎人◎も◎美◎し◎く◎若◎き◎天◎女◎も◎是◎れ◎神◎の◎も◎の◎な◎れ◎ば◎也◎而◎し◎て◎マ◎ホ◎メ◎ツ◎ト◎が◎此◎根◎本◎教◎義◎の◎上◎に◎發◎露◎し◎標◎置◎し◎鼓◎吹◎し◎た◎り◎き◎其◎魔◎王◎主◎義◎は◎世◎界◎に◎於◎て◎最◎も◎悲◎慘◎猛◎烈◎を◎加◎へ◎た◎る◎も◎の◎な◎り◎き◎神◎の◎教◎に◎抗◎す◎る◎も◎の◎は◎發◎見◎次◎第◎殺◎さ◎い◎る◎可◎か◎ら◎ず◎——と◎云◎ふ◎殺◎の◎一◎字◎は◎彼◎の◎魔◎王◎主◎義◎を◎最◎も◎現◎著◎に◎披◎瀝◎せ◎る◎も◎の◎に◎非◎ら◎ず◎や◎其◎身◎宗◎教◎家◎の◎列◎に◎加◎は◎り◎て◎而◎し◎て◎敢◎て◎殺◎を◎云◎ふ◎天◎下◎何◎人◎か◎戰◎慄◎せ

ざらむ、寔にや平和主義者を以て見れば、洵に是れ戦慄す可きの事に屬す、然れども人の世は折伏の何たるを知らざる也、王にして戦の庭に臨まば、我れ王を殺さむ。——とはチャールズの鐵騎に向て、クロムウェルが大喝せし言に非らずや、人は屢々此言に接して戦慄す、吾人も亦時に戦慄せざるに非らず、然れども其七度神に祈禱して而して後始て劍を把て大魔王と化せし、クロムウェルが心緒を洞察すれば、却て此一言能く彼の折伏主義を發展しつゝあるを認めず、非ざる可し、念佛無間、禪天魔眞言亡國律國賊の四大格言は、日蓮が其最初に於て發露せし折伏主義の福音也、國土亂れむ時は先づ鬼神亂る鬼神亂るゝが故に萬民亂れ、賊は國を劫かさむ、百姓亡喪し、君臣太子百官共に是非を生ぜむ、諸有の井泉池水一切盡く枯涸し、諸山燒燃して天龍雨を降さず、日月昏闇として明を現せず、十不惡の業道貪瞋癡倍増して衆生父母に於て之を

観ること、獐鹿の如くならん、——嗟吁其痛罵の聲の恐ろしきよ、日蓮は更に云へり、今の世は濁世と申して國土には魔來り鬼來り疫癘旺に流れて死人の屍山をなし野を埋む是を奈何——と聞く人は惡魔の聲なりと爲し、彼を辻の說法壇より蹴らず、むば已まざりしに非らずや、當時の人々は折伏の何たるかを解せざりし也、釋迦も在世數年の間折伏し、傳教天台も十數年間折伏す、ルイテルが羅馬法皇を彈劾して、汝靈俗二界に亘りて如何に勢力を有するも汝は惡魔の上に起てり、獨逸の一寒僧我神の上に起て汝等の總てより強し——と天下を獨占して叫びしもの、ルイテルが折伏主義を見る可し。

若し夫れマホメットに到ては、前後二十三年間悉く是れ血の上に起てり、彼のヨーロッパは血痕に充され、彼の歴史は裂かれし儘に血を帯びたり、マホメットは折伏主義を以て、徹頭徹尾布教上の本義となしたりし



が如し。コーランを一度繙きしものは、直に之を認識せむ歟、神の爲めに戦死せし人は不死にして樂園の鳥となる——是れ折伏主義の福音也。汝に反対する人に反対し神の宗教の爲めに戦へ——是れ折伏主義の標章也。汝の宗教に反対するものあらば見出し次第之を殺さざる可からず——是れ折伏主義の本義也。若しまた汝を誘惑するものあらば汝其處に殺せ——是れ折伏主義の命令也。戦は悲しむ可きことと左れど神の道を妨げ神を信ぜず聖堂より人を追放し坏することは神の目に向ては尙悲しきこと也——是れ折伏主義の由て現る標準也。神の爲めに戦ひしものは樂園の水流るほごりに永久暮し若き妻と樂しみ神の愛を受けむ——是れ折伏主義の特典也。

凡そ此くの如きは以てマホメットの折伏主義を見るに足らむ。日蓮が我を信するものは佛となり我に怨みを爲すものは無間地獄に墮ちむ

と叫びしに對比し、吾人折伏主義の光明を思はざる能はず。荒野の子にして此かる魔王主義を教界に樹てたるアラブハルは、抑も吾人に如何なる教訓をか示しける。

マホメットの信條として自からも信じ人にも示したるものは(一)神(二)天使(三)コーラン(四)預言者(五)審判日(六)善惡預定——此六ヶ條也。是れマホメットが自から信じし人に示したる信條也。

而して之に伴ふ實行は(一)祈(二)アルムス(三)斷食(四)メッカに巡禮す——此四ヶ條ならざる可からず。

世往々にしてイスラムの甚だ蕪雜粗笨なるを謂ふ。然れどもイスラムには嚴格なる斷食の法あり、一日五回の祈禱あり、メッカの巡禮あり、其他復雜なる儀式あり。イスラムは決して秩序なく儀式なき宗教に非らざる也。

善惡預定説は、神が總ての善惡を預め定めたりと爲すもの也。善と云ひ悪と云ふ、其來るもの將に來らむとするもの、神は悉く豫め之を定めたり。神は此世の人の幸不幸をも前に之を定めたり、信するやう信せざるやう定めたり、永久の幸否皆な神意より出づ。——と爲すもの也。即ち人の幸福より其の生死悉く神意に屬すと爲すもの也。之を以てマホメツトは、死を恐るゝ人よ、汝高塔の上に在りとも、死は必らず來らむ。——と云へり。マホメツトは此預定説より打算して、寧ろ汝の宗教の爲めに、戰て樂園に甦生せよ。——と云ひ、此く其魔王主義を發揮すると共に、地獄極樂を示し、また天國の美はしく、若き女をも示したり。マホメツトが折伏主義は、此預定説と恒に終始す。

祈禱に就て、マホメツトは云へり、宗教の基礎は清淨にあり、能き信仰は清淨の上に發露されむ、先づ祈禱を爲さむと欲せば、身を清めざる可か

らず、之れ身を汚れより洗ふ也、(一)惡及不正行より洗はざる可からず、(二)心に恥づべき傾向及び不徳より洗はざる可からず、(三)——と。又云へり、祈禱は宗教の柱也、樂園の鍵也、祈り無き宗教は善無し、二十四時間の中に五度祈る可し、(一)日出前、(二)午後、(三)三月没前、(四)日没前、(五)午前、祈る時は必らず、メツカの方に向ふ。——と。

祈禱は需め也、需めて得ざるもの何物かあらむ、饑えたるものが食を得ず、むば歌まざる可く、渴せるものは水を得ず、むば歌まざる可し、饑えたるもの、如く需めよ、渴せるもの、如く需めよ、天國には肉豊けく、不斷の小流れあり、神は必らず之を與ふ可し、而して祈禱するに當ては、先づ身を清めざる可からず、之を汚れより洗ひ、惡及び不正行より洗ひ、不徳より洗ひ、而してメツカの方に向はざる可からず。

メツカには、アラハムの踏みし、靈石あり、マホメツト之を以て、祈禱の

時にはメツカの方に向へと云ひ、且つ六大信條に伴ふ可き實行の終りにも『メツカに巡禮す』の一個條を加へたり。次にマホメットは實行に於て斷食を説けり、斷食を最も極度に厲行せしは婆羅門也。斷食の苦行は大なる思想を養ふに現著なる効能を有するものなるが如し。山中深く靜坐し、淨水に身を洗ひ、溪水と僅かの餌の外他を食せず、而して高遠なる彼蒼を仰いて、直に天空に觸接せよ、天は大なる思想を彼に授けむ。マホメットは曩に、祈りの前に於ける淨身を云へり、斷食も亦た之と同一意義を有して、而して淨身よりも更に一層有力なる効果ある可く説かれたり。婆羅門僧侶の斷食を爲すや、肉落ち骨出で、殆ど人間の相を全く失する迄に及ぶと云ふ、此くて以て化脱を得むとする也。釋迦が苦行林に於ける苦行の如き、また此くの如きもの之れありき。我國に在ても、禪僧が坐禪を爲さむとするに當りて、唯だ清

水にて焚きたる一椀の粥の外、これを口にせざる如き、また彼の山伏が峰入の行に於て斷食を決行するが如き、悉く皆な身心を根本より洗禮して、宇宙の大なる思想に接せむとするに外ならず。マホメット亦これを説き、イスラムに於て實行の一に加へたり。當時斷食を苦行の一に加ふると云ふ様な風習は、慥に各宗教に存したりしが如し。

吾人今彼の教訓を視むとする前に於て、一言此に議し置かざる可からざるもの有り。何ぞや、曰く、世動もすればマホメットを目して偽善者と爲すの誤謬也。

マホメットが此かる忌まはしき惡名を冠せらるゝに到りし重なる原因を尋ねるに、彼が宗教僧侶の身を以て、慢りに劍を把り、人生を殺戮するに、甚だ躊躇せざりしに存せり。即ち彼を偽善者となすものを以てすれば、マホメットは人生を濟度するものに非らずして、人生を殺戮する

もの(一)マホメットは自己の宗教イスラムを布教せむが爲めに神の名を濫用せしもの也(二)と爲せり。

彼が抱持し標章する魔王主義即ち折伏主義を目して直に偽善者の事而已と斷するものに就ては吾人敢て辯駁を繰返へすの勇氣を把持せず何と云へば吾人既に各章毎に論し去りたれば也此かる難者は獨りマホメットを偽善者として排擠し否定するのみならずクロムウエルをも同一意味の下に排擠し日蓮をも同一意味の下に否認しルイテルをも同一意味の下に咒咀せむとするものなれば也恐らくクリスト親鸞の如き平和の福音者に非らざる限り宗教家を以て目せざる偏狹者の言なる可く又マホメットや日蓮の折伏主義が何に因し何に激して發露し來たるかは彼等の深く研究するを欲せざる所なる可し然れどもマホメットは自己の宗教イスラムを布教せむ爲めに神の名

を濫用なせるものなりとの説に對しては聊か構論の要無き能はず。

マホメット果して此かる偽善者なる乎コランは炳かに荒野の子マホメットが性格及び其主張を露出せるもの也吾人は此コランを通じてマホメットを視而して此惡名の甚だ謂れ無きを覺えたりマホメットは其教訓に於て極力偽善者を憎みたりそは彼が偽善者を目して七段地獄中の最底地獄に落つ可きものと預定せるに就て徴するも炳乎たらずや彼が地獄極樂説に於て爲せる預定をして眞ならしめばマホメットは偶像崇拜者を憎むの情よりも更らに一層過酷なる憎惡心を偽善者の上に濺けりとせざる可からず嗟吁マホメット果して偽善者なる乎。

吾人は彼の教訓を繙き先づマホメットの偽善者觀を此に摘記するの要あり。

「オ、人々よ、地に在て正く好きに由りしものを食とせよ、惡に歩む勿れ、惡人は火を腹にのみ込むなり、再生の日、神幸を與へず。」(第二章)

「偽善者よ、彼れ、地上に腐敗の行爲をなせり、神は腐敗の行爲を惡む。」(第三章)

偽善者は地上に腐敗の行爲をなすもの、神これを憎むと云へるに非らずや。

「偽善者は偽りて神の信者と云ふ、左れば彼れ祈りの爲め起立するや、不注意也、只だ人に見られむことを望む、心清く神を思念すること莫し、唯だ口舌のみに神の名を唱ふ、而して信仰と不信との間に道ひ、彼れにも付かず、之れにも付かず、偽善者は地獄の火の底に赴く可し、助けらる人も莫し、左れば改め悔ひ、眞實に神の教に従ふものは信者と數へらる可し、而して大なる報酬を得む、神は惠深く智也、神に忠實なる

ものを神如何て罰せむ。」(第四章)

偽善者は生涯迷はざる可からず、而して未來に於ては地獄の火の底に赴く可し、叫喚するとも四邊に人も莫し——とはマホメットが偽善者の頭上に降下せる大痛棒也。

「偽善者は、神これを憎む、彼れ惡を命し、正を禁し、慈善を行はず、彼れ地獄の火に入らむ。」(第九章)

また是れ偽善者を拒絶せる聲也、其他コーラン中に於て偽善者を戒飭せる文字決して尠からず、嗟呼、マホメット、彼れ果して偽善者なりし乎、マホメットの偽善者を憎むの情此くの如く、マホメットの偽善者觀此くの如しとすれば、マホメットが決して偽善者ならざりしこと分明なる可し、吾人を以て見るに、マホメットは至誠熱血の荒野の子而己、彼に何等組織的の學賊無く、彼に何等秩序的素養無し、然かも自然の兒たる

マホメットは、ヘエラ山林中の苦行に由て、直に皇天の大に達し、直に天上の大思想に觸接したるもの也。彼が信條は飽迄も眞面目也。彼の濃紅色の唇を漏るゝ、既教は飽迄も熱誠也。此熱誠や、此眞面目や、此信條や、マホメットをして遂に自己のライフを血色に潤色するの餘儀なからしめ、遂に後世の偽君子をして却て彼に偽善者の悪名を冠らしむるに到りしもの歟。吾人は須らく彼に對するに、至誠熱血の自然の子を以てせざる可からず。

マホメットはアール、コーランの劈頭に記して曰く、

「信條のミステリーを信じ、祈りの定時を守り、貧者を恵み、示現を信じ、汝に下されしもの及び汝の前の預言者を信じ、未來を確信するものは榮ゆ。」

貧民を恵めとは、マホメットが幾度か云へる所也。汝の前の預言者とは

ダビデ、エス等を指せる也。

「信者間に喜びの音信を爲せ、善業を爲せ、然らば水のほとりの園に於て、自由に果實を食し、以前に食せしものなるを思ひ出さむ、而して其果實種々ありて相似たる可し……其地に在て貞節堅淨の妻を樂しむを得む。」(第二章)

「正人は神終の日、天使、コーラン、預言者を信じ、神の爲めに、金は親族に孤兒に要するものに、旅人に願ふものに、與へ、祈りを常にし、貧者を恵み、約を守り、堅忍し、眞實にして神を恐るゝ人也。」(第二章)

スカンヂナビヤの願ひの神と、凡ての野人が奉ずる神とは、マホメットに由て發揮さるゝとは、カトラエルが言也。マホメットが神は即ち是也。而して次ぎには、

「義務に非らず、心より貧者を恵むによし。」(第二章)

と云へり、之れ最も味ふ可き教訓也。

佛教に於ては、喜捨と云ふがあり、義務的に金を投ずるに非ず、之を受くる僧侶も強制的に受くるに非らず、心より信者が喜捨するを云ふ。貧民を憐むは、自然の情也、憐れむものは心より憐はれまざる可からず、只義務一遍に救助するが如きは、是れ慈善に非らざる也。マホメツトが偽善を憎むの情は、此一語中にも炳乎たり。

『妄りに自己の身體を害せざる様なれ、良心に反して不正を爲し、他の物を食る勿れ』(第二章)

『酒遊戯は大罪也、素より或用ありと云へども、其罪は用より大也、施與は汝の力に應じてなせ、孤子を能くあつかへ、汝の兄弟也、神は腐敗せしものと正しきものとを區別す』(第二章)

百薬の長たる酒は、百毒の長也、而して其毒なるに於て酒は薬たるより

も罪あり、マホメツト之を禁ぜり、只夫れ天國の酒は身を害せず、腦を害せずと云へり、孤子を待遇せよ、汝の兄弟也。——とは、以てマホメツトの温情を見る可き也。

アラビヤ人が非常なる温情を有し、人に對する毎に、大なる同情を濺ぎしことは、有名なる事實也、其風、丰容姿は、粗豪魁偉、而して其心緒、情操は、温乎として、掬す可きものあり、此くの如きは、所謂アラビヤ武士氣質なる可し。アラブソールたるマホメツトが右手に劍を持しながら、然かも貧人を憐れめ、孤子に恵め。——の語を絶えず繰り返へせしが如き、アラビヤ人特有の温情思ふ可き也。傳説によれば、水草を追ふて轉移するアラビヤの漂泊人種ベトウイン人が、其不識の客の來るや、直に之を天幕の裡に迎へ、蓄ふる所の寶品は悉く傾け與へて、以て其意に任す可しと爲し、縱令其來客が我が爲めに深警ありたるものなりとするも、猶驢馬

を屠りて之に饗し三日の間懇ろに優待して彼を俟ち快よく出立せしめ而して若し能ふ可くむば他の聖律に従て之を自から殺さむを欲すと云へり野蠻の土人に於て既に温情此の如きものありアラビヤ武士の名今尙世人の記憶に新たなるもの宜ならずや吾人を以てすれば之を是れ砂漠の中に咲きたる名花なりとや謂はむ。

マホメット其女を失へる時曰く、

「神之を與え神之を奪ふ神は讚美す可き哉。」

總てのものは神の物也彼女の生命は始めより神に由りて定められたるもの也神我に之を與え而して今之を奪ふ神は眞に讚美す可きに非らずやと其言稍や奇矯に似たりと云へども友其友に哭するの温情は尙此語の中にも認め得可し要するに此言は人の運命の神に由て支配され居るを示めせるもの也マホメット寛容と真情に就て曰く、

「人を許す能き言語は悪言を以て與へらるゝ惠みより善也惡を爲して後に人を惠むものはフリントが地に由て掩はれしものゝ如く雨降れども尙堅く残る也之に反し神を喜ばせ自己の精神の爲めに物を出せる人は小山の上の花園の如く強き雨降るとも尙果實を二倍せしむ假令降らぬとも夜露あらむ惡しきは人を誘ふに辛苦を以て導く左れども神は富めり施せ(第二章)

心より善を爲せ——とはマホメットが既に云へる所也彼は更に自己の精神の爲めに善事を爲せ——と云へりマホメットは到底偽善に與する能はざるもの也

マホメットは次で隱徳を説けり、

「人に施與するに陽なる可也左れど隱徳は尙善にして汝の罪を救はむ人に善を施さば必らず神報ふ必ず不正義はなけむ日夜公私に施



與する人は、必らず、神より報を得、恐れも來らず、また悲しみ莫けむ。(コ  
二章 第)

陽徳可也、隱徳に到ては、尙一層善也と云へり。左らば、マホメットの善惡  
觀や如何と云ふに、彼は善と惡との間に、炳然たる分界線を引きたるか  
如し、彼は兩者の性質を頗る明白に區分し去れり。

『善を行ふは惡を行ふに優れるに非らず、二者の全く異なる所は、猶生  
の死に於けるが如く、天國の地獄に於けるが如し、一は斷して爲さ  
る可からず、他は斷して爲す可からず。』

是れ豈に明白なる區分に非らずや、天國は地獄に比して優れるものに  
非らざる也、天國は全然地獄と性質を異にして樂園の極度也。

『神の愛するものは知慧を得む、之れ大なる獲もの、心の智より外思ふ  
勿れ。(コ一  
二章 第)

『神の宗教を信せざるものは、魃りの日、黒面となり、信者は白面となる、  
賞罰あらむ。(コ一  
三章 第)

『眞の信者よ、忍耐なれ、忍耐に過ぐる様に強めよ、木片に情なし、神を恐  
れよ、さらは幸ならむ。(コ一  
三章 第)

信心の堅固を説きし文字は、此外尙多し、日蓮が如きも、其弟子擯那等の  
信心堅固を説いて、歇まざりき、折伏主義を持して、教海萬里の怒濤渦中  
に掉す、マホメットも先づ其信者の信心堅固を欲せざるを得ざりき也、  
マホメット故に之を説くや、甚だ切なるものあり。

意識無うして犯せし罪は、罪を構成せざるもの也、マホメット説いて曰  
く。

『知らずして犯せし罪は、悔ひ、懊めよ、神は之を許さむ。(コ一  
四章 第)

マホメットが酒色の害を説きし言は、吾人の既に摘録せし所也、コ一  
ラ

ン第四章中にも記して曰く、

『眞信者よ、汝の財を妾に費す勿れ。』(コ1ラ4章)

と、此には只た妾にと云ひたれど、こは廣き意味に於て遊蕩と解せざる可からず。昔教界の一大勢力たりし羅馬が一朝にしてサーペントと墮落し去り、サキソニーの一寒僧ルイテルをして、我此に立て汝等の總てより強し——と絶叫せしめしもの、其因を尋ねれば、羅馬の僧侶が身を酒色に腐蝕されたりしが爲めならずとせず。

『神に仕へよ、他動物を神に擬ふる勿れ、父母に親切を示せ、親族、孤子、貧人、近隣の親族、或は他國人、即ち親族ならざる近隣、汝の手の中の捕人、親子、旅人等に親切なれ、神はペイン、グロリーを惡む、神は人を蟻ほども害せず、其善は必らず報ふ、之に二倍す。』(コ1ラ4章)

昔者動物を神に擬らへし時代もあり、或は龍の骨を祀り、或は鱈、或は鯨

の骨を祀り、或は蛇の骨を祀りしものあり、現にメツカ人は黒き一個の木片に拜禮するを無上の光榮とせるに非らずや、マホメット之を弟子等に戒めたり。

また貧人を恵み、汝の手の中の捕人に親切なれ、と云ふに到ては、彼が道徳的觀念、此一語中に湧出しつるを見る可き也。

『物を判するには、正義を以てせよ、之れ確かに秀でたる徳にして、神の命する所也、若し事物の判せざる時は神に聞て使徒(コ1ラ4章)に問へ、または終の日迄待て、之れ事を決する善法也。』(コ1ラ4章)

邪を以て事を詰し、隻眼を以て物を鑑別す可からずと云ふ也、正義の秀徳を謳へるもの。

自から責めて悔悛するは、人類の大なる美德也、悔悛は罪を滅ぼすこと甚だ多し。クリストの如きは之を以て悔悛を説くこと最も切なりき。

ホメツトも記して曰く、

『神は人の心中を知る故に、彼をして一人在らしめよ。然らば彼は自ら悔みて、自から其身を責むるを得む。此くして自から自己の心を害せしときは、彼汝に來り、神の許可を願ひ、使徒に其許可を願ふならむ。此くせば神は容易に其罪を許す可し。』(第五章)

罪人をして獨り密室に靜座せしむることは彼をして改悛せしむる上に於て、現著なる効力を有せり。マホメツト乃ち之を説き、而して靜に彼の悔悟するを俟てり。

『他人禮を以て汝に對するときは、汝は一層厚き禮を以て之れに接せよ。』(第四章)

マホメツトは曾て、汝に逆ふもの、總てを敵とし之を殺戮せよ。云ひたり、是れ今尙世人の記憶に新たあるもの也。此に謂ふ所の、他人禮

を以て來らば、汝は一層厚き禮を以て接せよ。——とは偶以て彼が激烈なる感情と其複讐心の強猛とを見る可し。

『汝の祈りの後、神汝の側に在り。』(第四章)

神何れに在りや、神何れに呼吸せりや、神は汝の祈りの後、汝の側に在り、於戲宜いかな。此言や、需めざるものには何の餌も與へられじ、身を清め、心を禮ひ、斷食の苦行を経て、而して靜かに祈りせよ。清き神は祈りの後、汝の側に在り。

『私人の話は無益にして一の善も無し、若し施與を賞し、正しくあり、或は衆人一致して賞する人の話に非らざれば無益也。善はなし。』(第四章)

無益の私語の甚だ不善なるを訓めたるもの也。人集れば必らず誹語其處に湧く、人情の如何ともす可からざるもの也。マホメツト乃ち私人の私語を卑みたり。

此かる閑あらば、人々よ、コイランと語り、アブラハムと語り、身を清め、祈りせよ——此くの如く云ふものマホメツトが聲也。

『宗教に於て自己を神に任せ、正を行ひ、神の友なるアブラハムの法に従ふより善きことは無し。』(コイラン 第四章)

更らに、マホメツトは人の悪を云ふを甚だ憎みたり。

『神は公然、人の悪を云ふを憎む、彼に由て害されむ人が助けを求むるに非らざれば、汝人の美を公にするも之を隠すも神皆之を知る。』(コイラン 第四章)

神は萬物の動靜を天の高きより悉く見つゝあり、強て他人の悪を發露せずとも、神之を知らざらむや。

マホメツトは約束の最も重むず可きを説きたり、一度約せしことは利

害如何に拘らず敢行す可きを説けり、曰く

『汝、人と約せば、己の不利となり、兩親の親族の利ならずとも、必らず之を爲せ、縦令彼富めりとも、貧なりとも、神は彼等よりも價あり、故に自己の約を守り、正義より離るゝ勿れ。』(コイラン 第四章)

如何に其教訓の嚴ならずや。汝の前に下されしものは汝之を信ぜざる可からず——とはマホメツトが屢々云へりき所也。マホメツトは此語を次て曰く、

『神と豫言者とを信ずる者は、豫言者に區分をなす勿れ、或人は我れ彼を信ずと云ひ、或人は他の豫言者のみは信ずと云ふ、而して又或人は其中間を取らむと云ふ、之れ既に不信者也。』(コイラン 第四章)

コイラン第五章の劈頭には、

『汝、約束を守れ。』

『眞正の信者よ、汝祈りを爲さむときは、汝の顔手は臂まで、頭をこすり足を洗へ。若し女と寝しならば、全身を浄めよ。若し病または水の無きとき杯は、砂にてこすれ。

約束の重むず可きを云ひ、また浄めの必要を云へるもの也。又曰く、

『神は汝の心中を知る、眞の信者よ、正義を守れ、證人となりしときも必ず正を行爲せよ。正義は敬神に迄、近よせるならむ。』

『神に近か付かむことを熱望せよ。幸福の爲めに、神の爲めに、戦へ。』

『盗みせしものは、手を切る。』

『汝若し人を審判せば、公平なれ、神は正義を好み。』

『常に善事に長け、人に勝れむことを勉めよ。』

『眞の信者よ、實に酒遊戯及び偶像は、サタンの爲す所にして、之を避けよ。左らば、汝榮えん。サタンは之等を通して、汝等の中に分烈不和を生ぜしめ、神及祈りを記臆せしめざらしむ。』

怠惰を誡め、サンタを説く。

若し善惡を以て多数決により決するものに非らずと云へるものに至ては、正に千古の眞理を道破せるもの也。

曰く、

『善惡は多数決には非らざる也。惡は多くの人好むと雖、善ならず。内實の價值あるものは、是れ善也。』

是非曲直分明ならざるも、輿論は決して如何なる場合に於ても眞理及び正義を代表するものに非らず。特に之をクロムウエル、ルーテル、日蓮マホメット等の現はれし時代及び其遺蹟に於て見るも、輿論は恒に彼

等の呼吸をして窒息せしめむとしたりしが如し。若し多数の審判を以てすれば、ルートル、日蓮等の偉業は悪と命名されむ。クリスト、釋迦の如きに在てもまた然り。清澄寺法壇上に於て四個大格言を絶叫したりき日蓮は、如何なる迫害に逢ひしぞ、一代に反抗するものは輿論の痛撃に逢遭せざる可からず、多数の非難に迫られざる可からず。然かも、真理は真理のみ、輿論は輿論のみ、悪や愚や是れ多数の狎るゝ所なるも、遂に善に非らざる也。

マホメットがコレイシユ族の爲めに迫害されしもの、殆むと測り知る可からざるもの、在り、マホメットは各所到着所に自己の歴史を赤血色に潤色しつゝ、彼は遂に他國の小麥を食せざる可からざるに到れり。當時コレイシユ族は多数也、マホメットは布教三年弟子僅かに十三人、戦争二十三年間、兵僅少のみ、國內の多数決を以て決すれば、是非炳乎

たるに非らずや、只だ夫れ真理は多数決に由て定まらず、悪は到底悪たるを奈何せむ。多数の悪魔と前後二十三年間鬭争せしマホメットが、此言ある、洵に欺むを得ざる也。

『真理を語るものは、流水ある園を得む、幸福絶うる時なし。』(第五章)

マホメットは屢々旅人を説き、小流れを説けり、思ふに是れサンディ砂漠より來りし、苦痛の反動なる可し。

『汝には保護の天使あるのみ、死の天使は人を死せしむ。』(第六章)

『神は汝に罰をおへり、汝の中に争ひを起し、他の暴を受けしめ得。』(第六章)

『内外の不正を去れ。』(第六章)

『偶像を拜する勿れ、父母に親切なれ、養育の難きより子を殺す勿れ、奸淫私通を爲す勿れ、孤兒の産を害する勿れ、孤兒の爲めになるやう費

○せ、常に公平を用ひよ、正義なれ、約を守れ、之れ神の命也、之れ我正道也、故に之に従へ(第六一章)

養育の難きより子を殺すもの、心情は大に同情を寄す可きものあり、然かれども是れ到底大なる罪惡たるを免れず、子を殺すもの、胸底に鬱積せる悲哀を分拆すれば、多くは其父母が人間の誦ら無きを悲み、敢果なみて、我子を再び我の境遇、我の悲の地點に致さしめざらむを欲し、此くて墓標の下に埋め去る所の所謂人生咒咀主義の産物也、其父母の心情を思へば、洵に流涕の歌む可からざるもの存するを覺ゆ、左れど是れ罪惡のペリソ中のものたるを奈何せむ。

世に何等の慘酷か孤兒の産を害するの酷薄に勝る可きや、其父母を失ひ、其兄弟を失ひし孤兒は、人生の最も薄倖なるもの也、人類相憐むの本義を以てすれば、大に温情を濺ざる可らず、マホメツトが温情を以てす、

必らず一言莫かる可からざる也。

『善をなせし人は、審判の日、善報を得む……十倍……惡しきもの、惡し

きを爲せしもの、亦た然り。(第六一章)

○『神は不淨の行、不正を嫌ふ。(第六一章)

『神、諸天使にアダムを拜せしむ、エゴリス獨り拜せず、彼は土、我は火より成る——と、神遂に放追す、エゴリスは惡魔人を迷はす——と、之を

放追するとき衣を與へて曰く、アダムの子等よ、我汝に衣を與ふ、裸躰を覆へ、敬神の衣は最上也——と。(第七一章)

『適當なる衣を着せよ……美ならず、不便ならず……而して飲食せよ、過度は神の憎むところ也。(第七一章)

○『神は不淨の行、不正を嫌ふ。(第七一章)

過不及なき之中と云ふ、衣は美を貴はず、清潔を旨とし、不便ならざる

を要す。是れ番に衣服のみに限るに非らず、總てのもの悉く然らざるは

無けむ。マホメットは其教訓の内に於て激烈なる戦争主義と極端なる執拗心

を披歴せり。彼れ曰く  
『我に逆ふものは次第に滅ぼさむ。彼等の知らざる方法に由り、我、彼等に

に長らく樂むで後罰せむ。是れ我法畧也。我が罰することは遅くとも

烈しかる可し。』(第七章)

嗟呼、マホメットが執拗の如何ばかり強きよ、我に逆ふものは次第に滅

さむ。——と云ふ次第の二字には無限の執拗の含まれつるを見る。我、彼

等を長らく樂ませ而して後罪せむ。是れ我の法略也。——と云ふに到て

は、是れ無限大の痛響也。恐らく其言は雲の果てより地獄の最底迄響け

るなる可し。

蓋し然かる執拗心は獨りマホメットにのみ存するに非らず、大凡そ世の薄幸兒には或る極端なる執拗なかる可からず、そは人の世が彼等を酷遇し冷視するに由りて、自然に發するの發作也。試にクリストの如き、ルイテルの如き、クロムウエルの如き、日蓮の如き、文界に在てはダンテの如き、バイロンの如き、悉く皆な大なる執拗に驅られたり。彼等の經來りし悲惨のライフ及び社會の迫害は、彼等を執拗ならざらしめむと欲するも得ざりき。左るにてもマホメットが咒咀の如何に恐ろしからずや。

『神の眼に於て、最も惡しき家畜は不正也。』(第八章)

『神、汝を強くし、汝等の心を一致せしむ、如何に富ありとも汝の心を一致せしむるは只神而已。』(第八章)

金權萬能を説くも、金權は決して人心を買収する能ざる也。彼は總ての



物品を買ひ得可し、總ての権利を買ひ得可し、學位も、勳位も、然れども人心をば買ひ得る能はざる也。マホメットは、更らに云へり。

『財を積み、神の宗教の爲めに用ひざるものは、悲しき罰あり、未來に於て其財火に熱し、汝の前額、横胸、背部、悉く焼け焦けむ。』(コ1ラ7章)

唯夫れ蓄積せむ爲めに得るの財は、世界の寶を活きながら埋むるもの也。彼等は到底黄金の奴隷たるに止まらむ而已、社會に對して何の献貢する所ぞ。

『信實ある男女、相友たり、正を命じ、惡を禁じ、祈を常にし、慈善をなし、神及び使徒に従ふ、神は河ある園を彼等に與へむ、永久其處にあれ、左れば神の好意は最も好きもの。』(コ1ラ8章)

『艱苦を忍べ、幸福を謝する人は信者也。』(コ1ラ9章)

『人若し正義ならぬことを爲し、自己の精神を害するものは、神は未來

に於て之を罰す。神の愛する人は正に導く、正を爲す人は能き教を得墨及恥を其面に得ること、莫し、惡行者は墨を以て黒むる如く、其面に恥もて覆はる。』(コ1ラ10章)

恥を得るは、墨にて其面を染むるが如しとの比喻甚だ面白からずや。現在に於て惡行を爲せる者は、審判の日に於て、其面に墨を塗らる可し、而して其墨は幾千百年の雨露に逢ふも、決して洗ひ落す能はざる可し。

『現在を擇び、而して奢るものは、來世に於て之れが平均を得、爲めに其幸福を削除さる可し。』(コ1ラ10章)

△ニ1チニ主義の如き惡本能論者流は、唯だ夫れ現在實在をのみ之れ認め、而して遂に未來を有せざるもの也。平家の豪奢は、壇の浦に於て盡きざるを得ず、何となれば彼は六波羅福原に於て有ゆる本能主義の行者たりければ也。

ニ1チエミ

義の本心

主義の

悪本能

十ゾ

一八一  
以て外ナリ者者池元半之物也ニ1チエミ

三千の舞妓花に舞ふの六波羅御殿乃至、藤原の榮華の夢に耽けたる平家を知るものは、何人も壇の浦の最後を想はざる能はざる可し。豪奢は身を滅すもの也。彼は到底一時の夢のみ。

『忍耐ある人には、榮ゆる子孫あらむ。』(第十章)

『運命は人の頭の周圍に懸かり、宛かも犬の頸環の如し、之を括り付く、之に行爲を記す、而して開けて、甦生の日に、天使云ふ、汝の書を読み、此の日、汝自身の精神は、汝に對して、十分の證也。』(第十章)

如何に興味ある教訓ならずや、我等が生涯の日記は恒に我等の頭の周圍に記されつゝあり、審判の日、神は我等の日記に従ひ之を證左として、賞罰を加ふると云ふ、誠に能き教訓と謂ふ可し。

『浪費は、悪魔の兄弟也。』(第十章)

『人を強うるは、大罪也、食の不足より子を殺すと勿れ、幽する勿れ、惡を

行ふ勿れ。』(第十章)

饑えたるものは、遂に度す可からず、多くの人の罪は、其大部分饑餓より來る、之れ憂ふ可きの事態ならずや。

『地上に於て、高慢に樂しむ勿れ、汝如何に高慢なるも、土地をして海底より低くからしむる能はず、汝の背丈をして、決して山より高からしむる能はず。』(第十章)

彼等が高慢と云ひ豪奢と云ふ、抑も何の高慢ぞ、何の豪奢ぞ、遂に彼等は其背丈をして山より高からしむる能はざるに非らずや。マホメットの此言、世の高慢者流を痛罵して餘す所なしと謂ふ可し。

『不和を播くは、サタン也。』(第十章)

『信用と、約を堅守す。』(第十章)

『眞の宗教を布教するは、只自己の神の爲也、何となれば、神は造りしも

の、助を要せざれば也。(第コ十章)

『祈りは人をして悪行汚行より避けしむ。(第コ十章)』

『現在は夢に似たり、富貴名譽は一時榮ゆる草花の如し、忽ち萎れむ。』

(第コ十章)

現在の幸福を祈るものは不幸なる人々也、美を實在にのみ認識する人々は最も不幸なる人々也、彼等の慾望や吾人を以て見れば、餘りに少なるを覺ゆ、大なる慾望は尠くとも永久の快樂に存せざる可からず、現世より通して未來界に於ける大なる快樂に存せざる可からず、本能主義者の如きは、最も僅少なる快樂論者而已、古來偉人は決して現在の幸福を祈らず、彼は未來界に亘る大なる快樂の上に大なる慾望を擅にす、彼等の希ふ所は、天國に甦生するに在り、不斷の花、不斷の春月、清き流れある天國に美はしく、若き妻と同棲するの大なる慾望の外、實在の區々たる

榮達名譽に踟躕たらざる也。

『富に由る人は、傲慢無禮となる。(第コ十章)』

金力に由り、若くは權勢に據り、此くて事を爲さむとするものは、金力及び權勢の外、遂に何物も認識する能はず、金力を以て動かし得ざるもの、在るをも認識する能はず、之を以て彼等は傲慢となり、横柄となり、遂には世の同情を喪つて、彼れ地獄に赴かざるを得ざる可し、恐る可きは、富を有するもの、行動ならずや。

マホメットは天國の酒を説きたれど、現世の酒に就ては、殆むど斷禁の命を下せり、曰く、酒勝負等は、争ひを生ずる故に、之を禁す——と勝負を目してアリストートルは盜賊より不良と云へり。

以上摘記する所は、マホメットが其實典たるコ十章に示せる教訓也、若し夫れ彼が實踐的の教訓に到ては、更らに大なるもの之れあらむ、左

れど吾人は今多言を費すの要を有せず、マホメツトが抱持する道德觀は、以上の斷片を通して、容易に窺ふを得るに非らずや。吾人はマホメツトを目して偽善者となすもの、須く如上の教訓を一閱せむを希はざる能はず。マホメツトは今や故人也、其燃ゆるが如き血液を保持せし肉體は既に人類外のものとなし去り居れど、彼が遺せる教訓は、アルルコ、ラン紙上の血痕と共に、長へに生きて、吾人を戒飾しつゝ、いかり而して其活ける私語や、是れ吾人が直に探で、以て善惡の標準とせざる可からざる所のもの也。

### 第十編 マホメツトの略生涯

アラビヤ特有の大熱情と大至誠とを持って、教界に驚異す可きサタン主義を樹立し、其ヘエラ山中靜坐默考の大産物たるイスラムの爲め、コランを説くには恒に殺人劍を持てするを遺却せざりしマホメツトの片影に就ては、吾人既に之を先の章に於て描き畢れり。此には聊か彼の略傳を記し置かむとす。左れど是れ彼の畧傳に非らずして、寧ろ其畧々傳なる可し。

マホメツトは西歷五百七十年を以て、亞刺比亞に産れぬ。(或は五百六十九年、或は五百七十一年とも云ふ)マホメツト(Mahomed)の名に就ても種々の説あり、或はムハメツト(Muhamet)とも云ひ、ムハメツトとは亞刺比亞語にて教主と云ふの義也。ハラビ(Harabi)とも云ふ。恐らくハラビと云ふもの眞ならむ。